刹那の愛の反逆・異世界漫遊録編　【まぶらほ編】

煌星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
刹那の愛の反逆・異世界漫遊録編　【まぶらほ編】

【Nコード】
N7933Z

【作者名】
煌星

【あらすじ】
拙作、刹那の愛の反逆・逆行編・異伝の太極天の遺志を継いだ横島忠夫がまぶらほの世界に介入する物語。
※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※
※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※
※※よこっち無双です。横島は原作基準ではありません、あくまで拙作仕様ですのでお気をつけを。

メイドさんと出会うよこっち（前書き）

まぶらほ編として独立させました。

全章若干、加筆修正しています……ほんの少しですが。

メイドさんと出会うよこっち

世界には特定の志向性を持った国際秘密結社なるものがいくつか存在している。
それはコスチュームやフェチズムを愛する者達によって構成される組織の事だ。
組織間には不要な対立を防ぐ為、国際コスチューム会議なるものも存在し、年一回総会を開いて色々討議がされているが……色々緩い為、機能しているかは疑わしい限りである。
それでもそれなり程度には纏まっており、主義主張を超えた友誼が結ばれる事も少なくは無い。

しかし、そんな物知らぬとばかりに孤高を貫いている者達もいた。
その一つ、水銀旅団（マーキュリーブリゲード）。
元は【赤パジャマ青パジャマ茶パジャマ同盟】の活動に、不満を持った者達で結成された組織である。
一種の選民思想であるパジャマ至上主義によって、その他の主義団体に攻撃を仕掛けている荒くれ者達だ。
現在は廃れたが、『捕らえたメイドの耳に水銀を流し込む』などと言う、恐ろしくもよく分からない方針を掲げていた時もあった。
もっとも、今は服を脱がしパジャマを着せるという変態的な方針をとっているが……どちらにしろ、碌でも無い事であるのは間違いない。

そんな彼らは最早恒例と言ってもいいぐらいに常連と化した相手、ＭＭＭ（もっともっとメイドさん）に攻撃を仕掛けていた。
ちなみにＭＭＭとは減少の一途をたどるメイドを保護すべく、メイドを愛する者達によって結成された組織である。
今回相手にしているのは、その中でも実戦経験が豊富な事で有名な第五装甲猟兵侍女中隊（パンツァーイェーガー　メートヒェンカンパニー）だ。
今まで苦汁を飲まされてきた相手だったが、秘密裏に入手した裏情報を突いた作戦が効を奏したのか状況は有利に動いている……今のところは、だが。

「どうやら悪魔（メイド）の集団に一泡吹かせる事に成功したようですな、カーボン卿……前線メンバーの一部を捕らえる事に成功しましたぞ」
「ふっ、それは喜ばしい事です……今までの苦労も報われるというもの。パジャマの素晴らしさが解らないあの愚か者共も、今回の事で少しは理解してくれるのでしょうかねぇ」

卿と呼ばれた壮年の男性……カーボン卿が気取りつつ笑みを浮かべるが、言っている事は甚だ変態染みていて滑稽だ。

「全くですな……ところで、捕らえた者達は如何しますか？　極上のパジャマを用意して、同士に引き込む準備は整っておりますが……」
「ふむ……裏情報を基に考えるなら、取り戻す為に侵入してくる筈……それも、かなりの大物が」
「やはり、来ますか……では？」
「捕虜を同士に出来ないのは残念ですが、この前用意した作戦で行くとしましょう……準備を整えて下さい」
「はっ！」

退出する部下を尻目に、カーボン卿は窓の外を睥睨すると……。

「パジャマのチラリズムが理解できない愚か者共よ……目に物見せてくれようぞ」

変態染みた言葉を溢しながら、捕らえたメイドを収容する建物に鋭い視線を向けるのであった。

◇

さて、此処で視点をＭＭＭに移そう。

戦況がメイド達にとって不利に傾く中、第五中隊の長であるゼルマ・グーデリアンは秘かに囚われの部下達を助けに行こうとしていた。

普段の彼女であればこのような行動はしない。

状況を事細かく読み取り、相手の隙を突いて颯爽と利を得る……それがいつもの彼女のやり方だ。

今回このような行動に出たのは、この状況を生んだ要因が自分にもあるからである。

近日、結婚を機に引退する予定である彼女を祝う為……華を飾ろうと逸ってしまったのが、現在捕らわれのメイド達なのだ。

「待っていろよ、お前達……必ず、助ける！」
部下のように逸る気持ちを抑えつつも、敵の目を掻い潜る為に自らの誇りたるメイド服やカチューシャすら脱ぎ捨てた彼女だったが……やはり焦っていたのであろう。
背後から忍び寄る存在に気づけずにいた。

「お待ち下さい、ゼルマ様」
「ッ？！　……リーラか。フッ、気取られるとは私も鈍ったかな？」
ゼルマの背後に忍び寄ったのは、中隊の切り札とも言えるリーラ・シャルンホルスト中尉であった……その手にはゼルマが脱ぎ捨てたものであろう制服が携えられている。
苦笑しながらも振り向いたゼルマの顔は色濃く焦燥していた。
……それだけ捕らわれた部下を心配しているのだ。

「今のこの状況を持ち堪えるには、貴女様の状況判断能力が必要不可欠です……本部にお戻り下さい」
「――――分かってはいるのだ……だがな、私を慕ってくれるあの子達を思うと落ち着けぬのだ」
「それも承知しております……故に、彼女達の救出は私が引き受けましょう」

微かに、ほんの微かに口元を笑みの形にしたリーラ。
それを目にしたゼルマは、思わず眼を見開く……物珍しさから。

「……お前がそういう切り返しをするとは、な」
「確かにこのような失態を仕出かした者達には、厳格なメイドたる者の心構えが些か欠如していると思っております」

微かに零れた笑みを消し、冷徹に言い切ったリーラだが……再び口元に笑みを浮かべ、今度は目尻も若干下げつつ告げる。

「しかし……彼女達がゼルマ様を心より慕っているのは疑いようのない事実であり、美しい心の在り様だとも思います」

「……普段からそういう表情をしていれば、皆にももっと慕われるだろうに」

「性分ですので」

ゼルマの切り返しに、再び表情を消すリーラ。

ゼルマはそれに苦笑し、目的地に目を向けつつ口を開く。

「……往く先は地獄だぞ？　まず間違いなく、罠や伏兵がいる筈だ」

「承知しております」

「助け出す仲間は少なからず負傷しているだろうし、複数だ……助け出すのは骨だぞ？」

「ゼルマ様に言われるまでも無く、分かっている事です」

「……強情な奴め」

「ゼルマ様には負けます」

リーラの不変不動な態度に嘆息するゼルマ。

無論、自分が行くよりも彼女の方が生還出来る確率が高いのは承知している……それだけ彼女の生存能力は高いのだ。

それでも、これからの部隊を育てる為に必要不可欠な彼女を危険に晒したくないと言う気持ちが消せない。

とは言え、こうしていても話が進まない事も確か……余り時間を置いては捕虜となった彼女達が遠方へと連れて行かれるであろう。

「……目標まで相手の斥候を掻い潜り、罠を解除し、救助するには少なくとも１０分はかかるだろう」

「妥当でしょう」
「15分だ……出来るか？」
「十分です」
厳しい表情で告げるゼルマに、再び柔らかな笑みで答える制服を渡すと……次の瞬間にはその場から消えていた。
「――――頼んだぞ、リーラ……我らのワイルドカードよ」

◇

リーラはゼルマと別れた後、ものの数分で目的地に辿り着いていた。周りにあった罠は既に無力化してあり、今は伏兵を探っている所である。
もっとも罠は余りにも多かったので、撤退方向のものだけを解除するに留めた……此処まで来るだけでも並大抵の事ではなかったのだ。
「（変だな、見張りすら居ないとは……まぁ、あの罠の規模を考えると分からなくも無いが）」
それでも余りの無用心さに首を傾げるリーラ。
無論、それ自体が罠である可能性も考えたが……それらしき気配も

無い。

「（少なくとも彼女達を逃す為の準備は整っている……後は逃してから判断するか）」

そのうす茶色の瞳を狩人の様に鋭くした彼女は、そのしなやかな肢体を室内へと滑り込ませ……音も無く降り立った。

「？　――――ッ？！　（リーラ殿？！）」

「「ッ？！　（え、ええッ？！）」」

余りに予想外な人物の到来に驚きつつも、必至に声を漏らさないように苦心するメイド達。

それは普段からその冷徹ともいえる態度と、恐ろしいまでの完成度を誇る能力を持つリーラが出向いた故だが。

もっとも、リーラ自身はそんな反応に眉一つ動かさず……備に彼女達の体を調べた。

「（ふむ、怪我はしているが動きに支障が出るほどでもないか……お前達、急ぎ此処から脱出しろ）」

「（リ、リーラ殿は？）」

「（私は殿を勤める……さぁ、早く行け！　Ａタイプのみだが、撤退用のトラップを仕掛けてあるから注意するんだぞ）」

困惑しきりなメイド達だったが、そこは前線メンバー……即座に気持ちを切り替え、音も立てずに去っていく。

そしてメイド達が室内から去った直後、空気が一変した。

「ッ！　（これは……チッ、しまった！？）」

瞬時にその原因を察したリーラは気配を消す事すら中止し、即座にその場から脱出する……が。

ドッゴオオオオン！！！

出た直後に小屋が爆破し、その爆風に晒されるリーラ。

「くっ！」

それでもその超人的な体術と機転で被害を最小限に食い止めると、此方の異変を察し戻ってきたメイド達を叱り飛ばす。

「リーラ殿！？　「馬鹿者！　さっさと逃げんかっ！！」　ッ？！」
「いたぞ！　メイド共が罠にかかったぞ！！　作戦通り行動を開始しろ！！」
「「「ッ！？」」」

戻ってきたメイド達の退路を塞ぐように、ワラワラと現れる水銀旅団のメンバー……その数、凡そ５０人ほど。
その全てが銃やネットの類を構えており、血走った眼を見開きリーラ達を牽制している……服装はパジャマ小僧のそれだが。

リーラは戸惑っているメイド達を叱りつつも、部下を逃がす道を確保する為に突貫する。
スカートを大胆に捲くりつつも、中を見せないように銃を取り出し掃射する彼女。

その余りの熟練した動きに水銀旅団も壁を崩す。
「さっさといけ！　そしてゼルマ様に指示を仰げ！」
「「「ッ！　すみません！」」」
メイド達は今度こそ速やかに撤退した……リーラの開けた壁の隙間から。
尤もその壁の隙間もメイド達が撤退した後、速やかに塞がれたが。
「（？　……妙にアッサリしているな、連中ならもっとしつこく追いかけると思ったのだが）」
壁を塞ぎつつも、メイド達に刺客を差し向けない相手をいぶかしむリーラ……もっともその回答はすぐ明かされた。
「くくくくく……まさか、まさかあのリーラ・シャルンホルストがかかるとは、夢にも思いませんでしたよ」
現れたのはカーボン卿……だけでなく、周りを取り囲む旅団の人数が爆発的に増えた。
しかも、精鋭中の精鋭らしくすべて動きが機敏な連中ばかりだ……格好は怪しげな一般人のそれなのだが。
「……なるほど、捕虜の数より相手の要員を捕らえる方針できたか」
「御明察！　私の入手した情報によると、近々貴方達の隊長が退職するとの事……あの慕われた隊長殿が退職する間際に私共が現れたら、必ずや先走った部下が現れると思っておりましたよ」
喜々として、これまでの経緯を語るカーボン卿。
周りでは旅団が銃を脇に置きカメラを乱射していたり、双眼鏡でガ

ン見していたりと鬱陶しい事この上ない……無論、リーラは隙など見せなかったが。

「結果として数人の前線メンバーを捉える事が出来た訳です、が……少し欲が出ましてね」

「……それはあの装置があったからか」

「そうです！　あの装置があったからこそ、考え付いた作戦です」

いつもならば最初に捕らえたメイド達のみを連れて撤退する事もありえたのだが、今回はとある装置があった故に違う結果となったのだ……リーラ達にしてみれば、かえって好都合だったと言えよう。その装置とは室内の熱源が一定以下になると、室内の空気を変換し爆発させるものである。

「余りに危険な装置ですが……相手がメイドなれば躊躇する必要もありませんし、大物がかかったのであれば死ぬ事もあるまいと判断したのです」

「……そして、この大軍か」

「えぇ、これだけの人員を用意出来た事もこの作戦を実行しようとした一つの要因ではありますね……まぁ、まさか軽傷で脱出されてしまうとは思いませんでしたが」

「我々メイドを舐めてもらっては困るな　（……とは言え、流石に危なかったが）」

二人が会話する中……周りの大軍は既に武器を構え、迫りつつある。

「もっとも、この数相手では怪我の有無など関係なく、どうしようもないでしょうけどね……くくく」

「……」

「貴女は裏ルートでかなりの懸賞金になりえます……その資質から

飼う事は不可能でしょうから、精々私達の肥やしとなって貰いましょう。それに、貴女がいなくなれば第五中隊もかなりがたつくでしょうしね」

一石二鳥ですと言って笑うカーボン卿……対するリーラは無表情だが、かなり焦っていた。

逃がしたメイド達が応援を呼ぶのも、ゼルマが救援に駆けつけるのも、そう大差あるまい。

しかしどちらにしても、暫し時間がかかるであろう事は間違いなく……またそれらも妨害されるだろう。

「逃がしたメイド達は残念ですが……なぁに、今度合間見えた時に捕らえて見せましょう」

卿はそう言うと、片手を挙げ同士を前進させる。

「あぁ、そうそう、貴女を救い出す為にメイド達が此方に来るでしょうが……妨害工作も万全ですので、期待するだけ無駄ですよ？では……捕らえなさい！！！」

カーボン卿は厭らしく笑うと、勢いよく手を振り下ろした！

「ちっ！」

無数の威嚇射撃を掻い潜りながら、何とか脱出の機会を窺うリーラ……しかし、用意周到に準備された捕獲攻撃を捌けるものでもなく。

「くっ、……っ！？　しまっ、キャン？！」

放たれた金網に動きを阻害され、そこに打ち付けられた電撃により

膝を屈する。

……ッ！

「呆気ないものですね……まぁ、それもこの数なればしょうがない事でしょうが」

「くぅ……　（拙い……体が痺れて）」

絶体絶命のリーラ。

そんな時、遠方で銃撃が響く……恐らく救援に向かおうとしたメイドと妨害部隊が交戦しているのであろう。

カーボン卿はそれに笑みを浮かべながら、倒れ伏しながらも自分を睨む彼女の顎をつかみ上げる。

……ウゥッ！

「実に反抗的な眼差しだ……ですが、だからこそ優越感に浸れるというもの」

「（……万事休すかッ？！）」

縄を持って近づいてくる者を睨みつけるも、麻痺した体ではそれ以上の事が出来る訳でもなく縛られてしまう。

ビュウウウッ！

「しかしさっきから何ですか、この音は？　一体何処から？」

何処からか響いてくる空気を裂くような音に、苛立ちながら周囲を見回すカーボン卿。
もっともその回答も直ぐになされる事となる……周囲の呼び掛けと間を置かずに、為された衝撃によって。

「カーボン卿！　上です！」
「なに？　……なっ？！」

ドゴンッ！！！

見事、カーボン卿と頭をぶつけたのは東洋風の青年だった。

「ッ？！　（何なのだ、一体？）」

流石のリーラも突然の珍事に眼を見開き、戸惑う。
目の前には腰まで陥没したカーボン卿とその傍で倒れ伏した青年がいた。

カーボン卿の方は頭から血を出し、気絶しているが……どうやら死んではいないようだ。
そして、青年の方は……。

『……いてぇ？！　一体、何なんだ？』
「「「「「ッ？！　（む、無傷？！）」」」」」

その時、周囲の男達とリーラの心は同じ事を思ったとか。
青年は辺りを見回し、リーラを目にすると急接近しその手を取った。

『何と言う美しいメイドのお嬢さん！　俺の名前は横島ただ……お？　……何で縛られているんだ？』

もっともその不自然な格好に頭を傾げたが。
対するリーラはその澱みの無い動きに目を見張ったが、この状況を脱する為に青年・ヨコシマタダオに賭ける事にした……その身から溢れる巨大なオーラを感じた故に。

「よ、横島様！　至急この縄を解いて、此処から逃がしてくれませんか！？」
『はえ？　……なっ？！』

一瞬何を言われたのか分からなかった横島だが、周囲を見回して……その異様さに驚く。

『な、何で銃を構えたカメコがこんなに大勢？！　此処はどっかの会場かッ！？　い、いや、そんな事はどうでもいいか……よし！』

横島は縄を解き始めるが、余りにきつい結びだったので霊波刀を生み出し一閃した。

「ッ？！」

リーラはその無造作に作られたライムグリーンの刀身に目を見張り見惚れる。

『これでいい……ん？　あんた感電してんのか？』
「あ……は、はい。周りの者達が打ち付けたスタンガンで……」
『なっ？！　男が寄って集って、何考えてやがる！？』
「い、今はそれより脱出を！」
『わ、分かった！　……ッ？！』

横島は激昂して気勢を上げるも、リーラは安全を第一にとって進言した。
彼はそれを聞き従おうとするも、ある事に気付き顔を強張らせる。

「ど、どうか致しましたか？」
『い、いや……よし、脱出するぞ！』

しかし、直ぐに気を取り直し、リーラをお姫様抱っこするとその場から掻き消えた。
残されたのは、縄を解き始めた辺りから横島を止めようと近づいた格好のまま、固まったように動かないカメ子達だけだった。

●忠夫がこの世界へ降り立った時のＭＭＭ第五装甲猟兵侍女中隊編成

★中隊本部
・中隊長……ゼルマ・グーデリアン大尉
・中隊長補佐……クリスティナ・ハーヴェイ大尉（オリキャラ）

☆第一猟兵メイド小隊（定員４０名）
・小隊長……リーラ・シャルンホルスト中尉
☆第二猟兵メイド小隊（定員２０名）
☆第三猟兵メイド小隊（定員２０名）
☆第四猟兵メイド小隊（定員２０名）
☆戦車猟兵メイド小隊（定員１５名）
☆捜索メイド小隊（定員２０名）
☆装甲メイド小隊（定員１５名）

●忠夫が降り立った時代
・和樹が１５歳の時
・リーラは１８歳
・ゼルマは２６歳
・クリスティナは２２歳

異世界に落っこちたよこっち

その日、横島忠夫は今後の活動方針を纏める為、冥界にある神魔最高指導部へと赴いていた。
既に、初代太極天が迎え入れ契約していた眷属達とは再会している故に、どういうスタンスを取るべきか迷ったからだ。
彼女達　（一部を除き、全て女性なのは言うまでも無い）は今頃妙神山で気ままに過ごしているだろう。

それはともかく、肝心の活動について決まった事はと言うと……今後も定期的に異世界を巡り、見聞を広めるという事で合意した。
初代太極天の時と違い、この世界に脅威となる者は既に居ない故の決定だ。

『しっかし、こうなるとあいつらが揉めるかも知れんなー……俺らと違ってまだ年若いし』
≪そうよねぇ、私達は既に万年生きているからある程度は達観しているけど≫

異世界を巡る旅に出ると言う事は、体感時間で凡そ１００年ほど忠夫と共にいられるという事だ。
残される方はそれほど間を置かず再会出来るのだから問題ないのではないかと言うと、そうでもない。
これからの異世界訪問で眷属同伴は最高二人まで……つまり、二人のみ１００年間忠夫を独占できるのだ。
眷属達にとって、これは計り知れない誘惑（ごちそう）である。
何せ大半が忠夫に惚れ、悠久の時を愛し合う為に運命を共にしているのだからだ。
これらを考えるとルシオラはやはり特別なのだろう……意識体とは

言え、常に一緒なのだから。

『俺も良くここまでいい女達を囲えたもんだ……正直今でも信じらんねぇ』

≪ヨコシマですもんねぇ……何だかんだ言いながら、やっぱりスケベな所は変わらなかったしー？≫

『しょ、しょうがねぇだろ？　アレだけの美女美少女に囲まれて、手が出せなかったら逆に怪しいじゃねぇか？！』

≪……一度は眷属皆纏めて、一週間ぶっ続けでやり通した事もあったしー？　私は実体持てないから、誰かに体の所有権を借りるまでお預けだしー？　結局、皆譲りたくなくてお預けくらったしー？≫

『ゴメンなさい、許して下さい、ルシオラ様』

ゴリゴリ精神の耐久力を削られた忠夫は、低姿勢で謝り続けた。

ちなみに、ルシオラは眷属となった者の中でも特に位階が近しい者であれば憑依が可能となっている。

話は戻って……ルシオラの機嫌は誠心誠意謝る事で何とかなったが、それは新たな災いを生んだ。

人界へのゲートに続く十字路を曲がろうとした時、接近する人影に気づかずぶつかってしまったのである。

『アタッ？！』

『おわっ？！　たっ、たっ、たっ……グヘッ？！』

その人物……キーやんが持っていた台座らしき物をもろに受け止めてしまった忠夫は、見事に下敷きになってしまった。

『よ、横島さん！？　大丈夫ですか？』

『大丈夫じゃねぇよ？！　何だよ、これっ！？　無茶苦茶おめぇぞ

！』
『これは横島さんが巡る、異世界の卵を生み出す装置ですよ……この機会にメンテしようと思いまして』
≪メンテって……どっか調子悪いの？≫
『ちょっとパワーバランスが可笑しくなっていましてね、その調整をしようと』
『どうでもいいから早くどけてくれ！？』
『はいはい、よっと……あ゛？！』
『な、何だ？』

余りにも不安を誘うキーやんの声に、忠夫は聞き返す。
しかし、キーやんの返答を聞く前に忠夫はその場から掻き消えていた……その場に極彩色の卵を残して。

『はわわわわ？！　ど、どうしましょ！？　どうしましょ？！』

キーやんはそのまま暫らくその場で奇怪な踊りをしていたそうな。
……老師が忠夫の帰りが遅いのを不信がって迎えに来るまで。

◇

忠夫がキーやんに問いかけた次の瞬間いた所は、青と白のコントラ

ストが眩しい雲海の上であった。
事情が飲み込めない忠夫は一拍の間頭が真っ白になっていたが、次の瞬間変化が起こる。
当然ながら、飛んでいる訳でもないものが滞空出来る訳も無く……落下し出したのだ。

『お、おわっ？！　ど、どうなってんだ？！　此処は何処だ？！
し、心眼！　ルシオラ！』

焦りながらも、相棒と奥さんに現状を聞こうとする……しかし。

『……』
≪……≫
『お、おい？　まさか、話せる状態じゃねぇって言うのか？！　……じょ、冗談じゃねぇぞ？！』

焦りが加速するもそれでどうにかなる訳でもなく、それどころか更に最悪な事が理解できてしまう。

『ッ、まさか……此処は異世界か？　――――って、俺何の制約も掛けられずに入ってしまっているぞ？！』

先ほどキーやんが言っていた事を思い出した忠夫は、一つの可能性に辿り着く。
基本、異世界に入る手順として必要になるのは……その世界と一時的な契約をし、その証に幾つかの制約を掛けてもらう事だ。
しかし、今の忠夫は事故で無理やり入ってしまったようなもの……かつて、太極天となる前の横島が宇宙の卵を一つ腐らせた時のように。
あれは禁忌を持ち込んだからという理由もあるが、それ以上に異物

が無許可で紛れ込んだ事が一番の原因だったのだ。

『ま、拙い？！　と、とりあえず力を封印して、少しでも世界への影響を抑えないと……っ！』

忠夫は慌てて双文珠を取り出し、己に封印を掛ける……無論、単純なものでは意味が無いので、複数の双文珠による積層型魔法陣を展開しての高度な封印式だ。
その結果、力は従来の１００分の一程度まで減衰してしまった……加減が効かず、抑え込める分だけ抑えられた故に。
また、基礎能力も落ち、文珠も単文珠しか使えなくなってしまう。
これは現在忠夫が扱う文珠が、人間だった頃とは比較にならないほど高密度で高性能だからである。

『はぁ……ま、仕方ねぇか。とりあえず、此処がどういった世界か確かめねぇと』

忠夫は≪飛≫の文珠で落下を止め、≪千≫≪里≫≪眼≫で周囲を見渡した。
その結果、分かった事は三つ。
此処は魔法社会が築かれている現代という事。
神魔の類は少なくとも見受けられない事。
そして、人間の力が極端に偏っている事だ。

『何か違和感のある世界だな……そういや、パワーバランスがどうこう言っていたっけ』

とりあえず魔法が一般的という事以外は元の世界と余り様相が変わらないので安心した忠夫は、これからどうするかを考え始めた……が、そこで更なるトラブルが発生する。

『ん？　何か力の制御が……おいおい、これでもまだ封印が足りないって言うのかよ？！』

そう、既に扱っているのは一つの文珠だけだと言うのに制御力が不安定になってきたのだ。
忠夫は慌てて更なる封印を掛けようとするも……運悪く、直下にあった雷雲に突っ込み――――

『アンギャ――――ッ？！』

……見事、雷の洗礼を受けた。
結果、忠夫はそこで意識を失い……落下した先でリーラと出会う事になったのだ。

そして時は戻る。
異様な雰囲気が漂っていたカメ子の集団から去ったように見えた忠夫とリーラだったが、実はまだ戦場にいた。
何せ、この世界は忠夫の知る世界ではなかった故に何処に逃げていいか分からなかったからだ。
では何処にいるかと言うと、実は移動していなかったりする。

◇

横島様に抱き上げられた次の瞬間、それは起こった。
周りの旅団の者達が慌てだし、私達には目もくれず辺りを探り出したのだ。
こ、これは一体どういう事なのだろうか？

「あの、横島様？これは一体？」
『いや、何処に逃げたらいいか分からなかったからさ、とりあえず俺達に対する認識をゼロにしたんだ』
「？」

認識をゼロとは……つまり目の前にいようと分からないような状態になったという事か？
これほどの事を一瞬で為せるとは……しかし、魔法を使ったような形跡は無かったが？

『とりあえず、行くべき方向を案内してくれ……俺自身早急に確かめないといけない事があるからさ』
「あ、はい……承知しました」

何にしろ、横島様は見る限り悪人などではないだろうから此処は頼

るとしよう。
……それ以前に恩人なのだしな。

その後、周りで右往左往する水銀旅団の包囲網からまんまと抜け出し、同士と旅団が向かい合っている現場まで来た。

『何だ、ありゃ？　メイドとカメ子の銃撃戦？』
「あのメイド達は私の同士です。同士と向かい合っているのは、水銀旅団というテロ組織です」
『……テロ組織？　アレが？』
「はい、かつては捕らえたメイドの耳に水銀を流し込むと言う恐ろしい拷問をしていた奴らです……今はそのような事はしなくなりましたが」
『なん……だと？』

私が戦況を窺いながらも横島様に組織の説明をしていたのですが、水銀旅団について説明した瞬間……その身に纏う空気が一変しました。

「よ、横島様？」
『あいつらはそんな非道な事をする奴らだって言うのか？　大の男が女の子に対して？　……ふざけんなよ』
「ッ？！」

私は息を飲んだ。
その身から立ち上がる空気は途轍もない怒りのオーラ。
横島様は唖然としている私をそっと木陰に降ろすと、眼下に展開している水銀旅団を睥睨し言いました。

『ぶっ潰してやる！』

横島様は私が止める暇もなく、一瞬でその場から掻き消え……次の瞬間、旅団のメンバーを地面に叩きつけていました。
その威力は途轍もないとしか言いようが無く、その衝撃的な出来事に銃撃戦は中断……この惨状でやってられる筈もないだろうが。
横島様に蹴散らされた連中は、揃って悲惨な状態へと早変わりしました。

「……これは、もしかしなくても拙いのでは？」

タラリとこめかみに汗が流れる。
明らかにアレは過剰な攻撃だ。
しかし、止める事など出来なかった……何故なら、既に全ての旅団メンバーが伸されていたのだから。

「ッ、１００を超える数を一分に満たない時間で……何と言う御仁だ」

私は未だ痺れる体を無理やり起こし、横島様に近づく。
今の横島様は明らかに正常な状態ではない筈だ。

私の話を聞くまではのんびりした空気を纏う普通の青年だったのだから。

「横島様！」

『！　もう動いても平気なのか？』

「はい、それよりも……少しやりすぎです」

『う……いや、でもな？』

「今の旅団はさっき言ったような事は一切やってはおりません……大体、十数年前までの事です」

『……そ、そうなのか？』

横島様は頬に一筋の汗を流しています……漸く、御自分のやった事を正しく認識して下さったようですね。

まぁ、私としてはこのような者達どうなろうと構わないのだが。

「私の言い方も拙かったのでしょうし、正直このような者達などどうなろうと構わないのですが……もう少し落ち着きを持たれた方がよろしいかと」

『……ごもっともです』

横島様はいつの間にか正座をして私の言葉を聞いていました……ちょっと可愛く見えますね、周りは惨劇の舞台さながらですけど。

その時、私に声がかかりました。

「リーラ！」

「……ゼルマ様」

「無事だったか……旅団が此方に攻め込んできた時には、お前がどうなった事かと心配したぞ」

「ご心配をお掛けしました……危ういところを、此方におられる横島様に助けて貰ったのです」

私が正座している横島様を示そうと思うよりも早く、彼はゼルマ様に接近していました。

『これは美しいメイドのお姉さ……ん？　っと、失礼しました』

「……横島様？　私の時のように手は握らないのですか？」

『いや、だって人妻のようだし』

どうやら指輪に気づかれたようだ……出来れば行動を起こす前に気づいて欲しかったが。

ゼルマ様を見れば珍しく顔を紅潮させている……無論、恥ずかしさで。

「リ、リーラ？　この男性は？」

「この御仁は横島忠夫様……旅団に捕らわれ、あわや奴等の手にかかる寸前で救ってくれた方です」

『いや、偶然の賜物なんだけどな』

「確かに出会いは偶然でしょうけど、その後助けて貰えたのは確かな事です」

「……どうやら、うちの者が……いや、私達もか、助けられたようですね。皆に代わり、厚く御礼を申し上げさせて貰います……ありがとうございました」

『い、いや、大した事はしていないから頭を下げないでくれ！』

ゼルマ様が頭を下げた事に、横島様は酷く驚かれ慌てられました。しかし、ゼルマ様にも受け入れられたのなら御主人様の前にお通ししても文句は言われまい。

「ゼルマ様、これから横島様を御主人様に御紹介してはどうでしょう？」

「ふむ、そうだな」
『い、いや、ちょっと待ってくれ』
「？　何か不都合が？」
『会うのはいいんだけどな、少しやりたい事があるから時間をくれねぇか？　……ほんの数分でいいからさ』
「そういう事でしたら如何様にでも……私は皆に周囲の片づけを指示してきますわ。リーラ、横島様の御傍に控えてなさい」
「はっ」

私は去っていくゼルマ様を見送ると、その場に腰掛け瞑想のようなものを始めた横島様を眺める事にした。

◇

俺は未だ興奮気味の精神を落ち着けつつ瞑想に入る。
そのまま内面を探ってみると、今の自分がいかに微妙で危険な状態なのかが理解できた。
何せ焦りながら封印を施した上に、その後暴走に近い状態になったからなのか……俺という存在がこの世界と半ば融合しかけているのだ。
おそらくだが、封印の文珠を再度掲げた時に雷を浴びたせいではないかと思う。

そう、力を封印する代わりにこの世界の雷をこの身に封じたのだ……世界との半融合もこれのせいだろう。
無論、俺は元々この世界の住人ではないから完全に融合するなどありえないのだけど……だからこそ危険な状態と言える。
言わば、俺の今の状態は積み木の下に嵌った欠片の一つなのだ……
当然、俺に異変が起これば積み木がぐらつき、場合によっては全てを巻き込んで崩壊する。

『（拙いな、早いとこ代わりになるものを探して埋め合わせないと……こういう時、心眼がいてくれると助かるんだけどな～）』

次に、この世界の力に換算にした場合、今の自分がどれほどの実力を持った存在かを調べてみた。
やり方は簡単で、世界と半ば繋がっている事を利用して現存するオーラの強さを検索するのだ。
幸いと言えるかどうかは微妙だが、まず最高峰に位置するであろう事が分かった……ただ、今の俺と同等の力を持った者が一人いるようだが。

『（もしかするとそいつが鍵になるかも知れねぇな……とりあえずは保留だけど）』

何はともあれ、自分の現状を確かな物にしなければ次の行動には移れまい。

『（まずは拠点を手に入れて細かな情報収集だな……此処の御主人とやらが協力してくれたら話は早いんだけど）』

俺は静かに瞑想から覚めると立ち上がった。

『待たせたか？』
「いえ、では行きましょうか？」
『あぁ、頼む』

俺はまるで小竜姫の可憐さとワルキューレの鋭さを兼ね揃えたかのようなリーラの案内で屋敷へと入っていった。

忠夫の戻りの遅さを不審に思い冥界に来た老師が目にしたのは、奇妙な台座を前にして踊り狂うキーやんであった。
周囲にはそれの他に忠夫が持っていたであろう話し合いの資料が落ちている。
それを見た老師は大体の事情を把握し……とりあえず、忠夫の眷属を呼びに行く事にした。
……キーやん【フルボッコ】大会を開催する為に。

『『『『忠夫を何処へやったーッ？！！』』』』
『ギャピーッ？！』

●よこっちの現在の状態
★まぶらほの世界へ落ちる前
マイト数……約６００万マイト

★まぶらほの世界へ落ちて封印した後
マイト数……約６万マイト
単文珠のみ使用可能、生成と制御は問題なし……但し、生成出来る文珠は基のレベルでの物なので湯水のようには創れない。
他の霊能や技なども、効力は落ちているが使用は可能。
眷族は連れていない状態だったので、召喚は不可能。
ルシオラの意識体と心眼は忠夫の内側で休眠状態。
魔法回数……測定不能（資質を基準にしているのでこうなる）

メイドさんを救うよこっち

屋敷に通され、彼女らの主人に会った瞬間分かった、解ってしまった。

この老人が己の欲望に忠実で、それを成す為ならば如何様な無理でも押し通すであろう事が。

まぁ、いい歳した老人が数十人の……しかも年若いメイド達に囲まれて、嬉しそうに朗らかに笑っていればそう思ってしまうのも仕方ないだろう？

俺も今のような道を歩んでいなかったら、恥ずかしげもなく胸の内を叫んでいただろうな――――

うらやましいぞ、コンチキショーッ！！

……と、血涙は必需品か？

いや、まぁ……俺も負けないくらい好い女を侍らせているけどさ。

『……俺も若かったという事か』

「？　どうかしたかね？」

『いや……とりあえず、自己紹介から始めるべきかな？　俺の名は横島忠夫だ』

怪訝な顔をされたので、軽く苦笑を浮かべながら俺は自らの名を名

乗る。
流石に本来の正体までは早々語れはしないが、今後の事を考えると……この主人ぐらいには明かすべきか？
「横島殿か、わしの名はロメスト・ディバーグ……彼女達、第五猟兵侍女中隊の主をしておる」
『第五？　猟兵？　……色々突っ込みたいところはあるが、此処には中隊規模のメイドさんがいるのか？　ドンだけメイド好きなんだ……』
「はっはっは、メイドは最高だからな！　……まぁ、それよりも、だ。君には本当に助けられた、是非お礼を言わせてくれ！　ありがとう！」
「「「「「ありがとうございます！！！」」」」」
老人……ロメストさんは突如立ち上がると、此方に向けて頭を下げてきた。
見れば周囲のメイド達も同様にしている。
『……は？　お礼って？』
リーラを助けた事か？
……俺としては成り行きだっただけに、礼を言われるとむず痒いんだが。
「リーラを助けてくれた事はもとより、此処に迫ってきていた水銀旅団を殲滅してくれたお蔭で、メイド達に被害が出ずに済んだのだ……ゼルマが予測していた結果ではかなりの被害が出そうだったからの」
「はい、御主人様の言う通りです。リーラが捕虜の救出に向かった後、此方に現れた部隊はアレだけではありませんでしたから……判

明しているだけでも、四個中隊は迫ってきておりました」
『そうなのか？』
俺は隣にいたリーラに聴いてみる。
あの時の俺は周囲に気を配れるほど余裕なかったからな、情けない事に。
「はい、私もあの時は気付けていませんでしたが、この周囲を大規模の旅団兵が取り囲んでいました……今までにない規模で、です」
「しかし、横島様が我々と交戦していた部隊を一瞬にして壊滅させてくれたので、此方も不意を打たれる事なく応戦出来ています」
……応戦出来ています？
『って、今も戦っているのか？！　それにしては音が聞こえないけど……あぁ、防音か』
「左様……ま、不意さえ打たれなければ負けはせんよ」
う～ん、女の子が戦っているのに呑気に茶なんて飲めないんだが……言っても取り合って貰えないか？
「しかし、本当によくやってくれた！　丁度ゼルマの引退に合わせて、本拠地も移動しようかという時にこの騒動だったからな」
『引退？　……あぁ、寿退社みたいなもんか？』
まぁ、主に仕えるメイドさんとは言え……年若い女性が未婚のままって言うのも寂しいよなー。
ん？　俺？
俺は眷族皆と婚姻を結んでいるぞ？
……無論、性別が女である者とだけだけど。

「はい、まだまだ人事に若干心配事もあるのですが……御主人様が気を利かせて下さいまして」
「ゼルマの夫になる者は中々に好青年だからな……彼はいつまでも待つと言っておったが、新婚さんを縛り付けるのもどうかと思ったのでね」
「やですわ、御主人様ったら！」

ドゴッ！

「ふごっ？！」
『……　（オイオイ）』

ゼルマさんの照れ隠しであろう右ストレートが、ロメスト老の左頬に突き刺さった……静かな人だと思ったんだけど、以外に過激派なのか？

「ぜ、ゼルマの突っ込みも久しぶりだな……ゆ、油断しておった」
『だ、大丈夫か？　じーさん』
「う、うむ！　なーに、これぐらい周りにメイドさんがおれば瞬時に回復するよ……わしのメイ度は並ではないからの！」
な、なんか嘗ての自分を見ているような……今もか？
つーか、メイ度って……何？

「それで、話は変わるのだが……横島殿は何故このような場所へ？」
『んー、できれば余り聞かれない方が良いんだけど……まぁ、じーさんには話すつもりではいたし、主だった子達には話してもいいんだけど』
「ふむ……ではお主らは下がってなさい」

『いいのか？』
「ふ……これでも人を見る目は持っているつもりじゃ。お主は不埒な真似をするような者ではなかろう……それ以前に、恩人じゃしな」
余程忠実なのか、その言葉が終わる前には全てのメイドが消えていた。
俺は一つ息を吐くとぽつぽつと語りだした……己の素性と目的を。

◇

全てを語り終えた時にはかなりの時間が過ぎていた。
まぁ、それも話の合間に質問を挟んだからだが。
じーさんは疲れたように背もたれへと体を倒し、深く息をつく。
「……ふぅ、只者ではないとは思っておったが」
『すまないな、厄介ごとを持ってきて』
「それは御主のせいではなかろう？　……寧ろ、被害者ではないか」
『ま、そうなんだけどな……慣れているよ。トラブルには事欠かないし、ははは』
じーさんはあっさり……とまでは言わないが、それなりにすんなり信じてくれた。

しかも、知った後でも態度は余り変わらなかったのが俺的には嬉しかった……大抵は祭り上げようとしたりするからな。
まぁ、ただ単に関心がないだけかも知れんが。

「……ふむ、ある意味天啓……いや、天恵なのやも知れんな」
『ん？』
「見ての通り、わしも既にいい年じゃ。そろそろ次の主にバトンを渡すべき頃合にも思っておった……そこに舞い降りたのが御主じゃ」
じーさんは朗々と語る……何だか目つきが可笑しくなってきた様な？
「多くの従者を抱え、トラブルをものともせず……神魔という人智を超えた存在である御主が！」

まぁ、確かに俺も多くの女性を囲っているし、トラブルに巻き込まれてもどうにか乗り切ってはいるけどな……ものともせずって訳じゃねぇぞ？
正直、毎回それなりに頭悩ませていたし……今回は未だ見通しが立ってねぇからな。

「そして御主自身、拠点と協力者を求めていると言う……正に打って付けじゃろう、メイド達の新たなる主という立場は！！！」
『……えーと、つまり俺に彼女達の主になれと？』
「うむ！」
盛大に頷かれたよ……いや、まぁ、確かに助かるけどさ。

『しかし、俺はいずれこの世界を去る存在だぞ？　本来の異世界訪問なら１００年は滞在できるし、世界そのものからも認められているから眷族として連れてもいけるけど……今の俺はそれも出来ない

立場だからなぁ』
「そこら辺は追々考えればいい事じゃろう？　御主自身手段は選んでおれん様だし、の？」
簡単に言ってくれるなぁ。
あんまり深く関わりすぎると情も湧くし、離れたくなくなるんだけど……特にメイドなんていう献身的な存在なんて、な。
ディル＝リフィーナの時は傍に玉藻がいたし、メイド達も仕える主がいたから問題なかったけど……それでも羨ましく思ったもんだったからなぁ。

「ともかく、じゃ……御主にはわしの後継者として彼女らを導いて欲しいのじゃ！　なぁに、彼女達も誇りあるメイド……立場は弁えるじゃろうて」
『……人の心はそう簡単じゃないだろうに』
「それが分かっておるなら大丈夫ではないかの？　少なくとも、彼女達を傷つけるような事はせんじゃろうし」
『……はぁ～、分かったよ。でも、いいのか？　勝手に決めちまって？』
「心配はいらんよ、これでもＭＭＭの副会長じゃからな……はっはっはっ！」
こ、このじーさんは……はぁ～、これだから権力者って奴は。

◇

アレから食事会となり、続けざまにゼルマさんの引退式となった。
俺への礼とやらは主としての権限とは別に、これの後執り行うらしい……何だか厄介ごとの香りがするんだけど、何でだ？
俺の目の前では、全てのメイド達に祝福されながらカチューシャを返還するゼルマさんがいた。
ちなみにあの水銀旅団は既に追い払った後だ……メイド達に犠牲者はなく、被害も軽微だったらしい。

「これも向こうの指揮系統が混乱していたお蔭です……お手柄ですね、忠夫様」
『アレは偶然の産物だったんだけどなぁ』

メイド達が帰還した折には、リーラとのそんなやり取りもあった。
既に俺が後継者である事は認知されており、揃って跪かれた時には眩暈がしたものだ。
まぁ、従者云々は小竜姫なんかで慣れているけど……規模がなぁ？

『ゼルマさんが引退した後は誰が中隊を纏めるんだ？』
「能力と序列からいけばクリスティナ大尉なのですが……」
『……が？』
「あの人は少し病弱でして、医者が言うには原因不明なのです……何と言うか、病状が特定できないと」

そう言ってリーラが指す方向を見れば、ゼルマと抱き合って別れを惜しんでいる女性がいた。
病気と聞いたので少し霊視して見たが……なるほど、確かにこれは

病気だな。

『少し話は逸れるんだが、悪霊とか見た事ないか？』

リーラにのみ聞こえる声で訊ねる。

「悪霊ですか？　すみません、私共は魔法の使用を禁止していますので……自然とそういう超常的な事には疎くて」

聴けば、メイドの嗜みだそうだ……正しくは、ハーグ陸戦条約に基づいているらしいが。

まぁ、確かに魔法で奉仕されるより手ずから接せられた方がいいよな。

『まぁ、それも場合によりけりだな……彼女には悪霊が棲み憑いているぞ？　しかも癌に憑依する形で、な』

癌自体に寄生しているからなのか、姿形が特定出来ないんだろうな……それに悪霊が住み着いているから普通の治療は受け付けないし。

「なっ？！　そ、それは本当ですかっ！？」

驚きに眼を見開くリーラ。

その声に気づいた、他の者達も此方を見やる。

「リーラよ、どうかしたのか？」

「ご、御主人様！　クリスティナ大尉の病原が分かりました！」

「な、何！？　それは真かっ？！」

「本当なの、リーラ？！」

俺とリーラに群がるじーさんとメイド衆……鬼気迫った顔がちょっと怖いぞ？
俺は落ち着けるのは無理と判断し、詳細を告げる。

「で、では、魔法医に診せれば？　確かに今までそちらには掛かった事はありませんでしたけど……」
『いや、多分無理だろ……余りに根強く癒着しているからな。ま、俺が何とかするよ』
「え？」
『じーさんなら知っているだろう？　俺ならそれが可能だという事を』
「うむ……しかし、よいのか？　御主が力を使うと言う事は……」
『そこまでだぜ、じーさん……その先は言っちゃいけない』
「う、うむ」

俺の今の状態を知っている故に、不安が出てしまうのは分かるけどな。

『なぁに、こんだけ美人なメイドがいるなら失敗なんて出来る訳ないだろ？　俺のメイ度も並じゃねぇぞ？』

なんてな？

「い、いや……そっちではなく御主自身の事じゃ」
『あ？　あぁ、そういう事か……心配いらねぇよ』

まぁ、確かに今の状態で力を使ったら寝込む可能性大だけどな……
やらねぇ訳にはいかないだろ。
それでもまだ不安そうな表情をしていたので言ってやる。

『これこそ天恵だろ？』

ワイルドカードを嘗めんなよ？

「ッ！？　……そうじゃな、すまんが頼む」

『任された……んじゃ、クリスティナ大尉だったかな、今から治療するぞ』

「え……きゃ？！」

俺は事態が全く理解できてないメイド達を他所に、不安げなクリスティナを抱き上げるとベッドのある一室へと向かった。

ベッドに寝かされるまで終始顔を真っ赤にさせていた彼女だったが、その後にされた行為でその限界を超えたようだ。

「ちょ、な、何故服を？！」

『すまんが、地肌に触らんと悪霊の転移を防げんからな……男に触られるのは不本意だろうけど、我慢してくれ』

「……分かりました」

『すまんな』

俺は湧き上がる煩悩を制御しつつも、背後から突き刺さる殺気の篭った視線にビビッていた。

『（この視線はリーラか？　気持ちは分からんでもないが、勘弁してくれ）　治療自体は直ぐ済むけど、かなり衝撃があるだろうから耐えてくれよ？』

「は、はい」

剥き出しになった裸体の上から心臓と下腹部の上に掌を置いた俺は目を閉じ、心眼を持って霊視する……今にも暴走しそうな煩悩を押さえつけながら。
心眼自身が目覚めていたらもっと簡単だったんだけどなぁ。
俺は直ぐに病原体たる悪霊を見つけると逃がさないように包囲し、一撃の下消滅させる！

『汝が居場所は此処に在らず、禁ッ！』
「きゃうっ！？」

言霊と共に発せられた強大な波動は、抵抗などものともせずに悪霊を消滅させる。
あえて言うまでもない事だが……彼女自身に影響を与えない為、波動の出力に細心の注意を払ったのは当然の事だ。

『……。……ふぅ、転移はしてないな……終わったぞ』

俺は残留思念がないかを確認した後、素早くタオルケットを掛けクリスティナから離れると……後ろにいたリーラに目を向ける。

『だから、その殺気の篭った視線を引っ込めてくれねぇかなー？』
「ッ？！　……知りません！」
『やれやれ……じーさん、これでもう大丈夫な筈だ。後は痛んだ器官をゆっくり治療したら、健康体に戻れるよ……そっちは自然治癒に任せた方が体に好いからな』
「うむ、ありがとう……ところで、御主は大丈夫なのか？」
『んー？　まぁ、平気だ……多分』

俺はそう言った直後、その場に倒れた……周りの悲鳴を聞きながら。

「た、忠夫様？！」

薄れ往く意識の中で俺は、泣きそうな顔のリーラが駆け寄ってくるのを見た気がした。

◇

忠夫が倒れてから一週間が経った。

既に忠夫は目覚めていたが、自身の状況が理解できないでいた。

『……何で？』

「何がですか、忠夫様？　はい、お口を開けて下さいね～」

甲斐甲斐しく世話をするリーラ。

忠夫的には恥ずかしくはあるが、邪険にするほどでもない。

「リーラ、次は私ですよ？」

「……しょうがないですね、少しだけですよ？」

リーラの反対側にいるクリスティナが世話役の交替を申し出る。

それに渋々了承するリーラ。

欧州系美人なリーラと似たような顔立ちではあるが、病気から解放されたクリスティナは大和撫子的な奥ゆかしさがあった……行動は正反対のような気もするが。
リーラも似たようなものだが、此方はまだ若干子供っぽい所がある。
それはともかく、二人の美女に甲斐甲斐しく世話をされ続ける忠夫は再び口を開き疑問を口にした。

『何で、俺は裸なんだ？』

そう、理解できない状況とは自分自身の格好についてだった。
忠夫には就寝時裸になる癖などないし、そうなる状況でもなかった筈である。
しかし、リーラとクリスティナは頬を染めつつもはっきり言い切った。

「それは汚れた御体をお拭きする為ですよ？」
「そうですわ……隅々まできちんとお拭きしないと駄目ですから、ね？」
『全部見られたぁ――――ッ！？』

恥ずかしさにのた打ち回る忠夫だったが、そこに止めの一撃が加わる。

「その、私の体も見られましたし……お互い様ですよ？」
「……とても、ご立派でした」
『ギャ――――ッ？！　わいは、わいはぁ？！』

ドキドキなんてしてへんのやぁ……そう弱々しく呟きつつも轟沈する忠夫。
二人のメイドはその様を可笑しそうに眺めながらも、更なる追撃を

かまそうとする。

「さ、今日はまだお拭きしていませんから、今から致しますね……ポッ」

「そうですわ、隅々までお拭きしませんと……ポッ」

『ポッって言わんといてぇ！？　イヤ――――ッ？！』

忠夫は慌ててタオルケットを体に巻きつけると、その場から転がるように撤退した。

「「あぁ、忠夫様っ！？　何処へ？！」」

後方から聞こえる声に答える事もなく、逃走した忠夫が行きついた先は……ロメスト老が優雅に寛いでいる居間であった。

「ん？　おぉ、気づかれたか横島殿……して、何故そのような格好で？」

『じ、じーさん！　何で、ああいう世話をやらせたんだッ？！』

「ああいう世話？」

『寝ている間に裸にしたり、体を拭かせたりした事だよ！』

「……わし、そこまでしろとは言っておらんのだが……余程気に入られたのだろうな、羨ましい」

忠夫はその言葉を受け、早くも自分と言う存在が人を惹きつけている事態に頭を抱える。

そんな忠夫を可笑しそうに見つめていたロメスト老だったが、不意

に悪戯っ子な顔をすると声を掛けた。

「横島殿、何はともあれ暫らくぶりに風呂でも入ってきたらどうかね……その方が気分もさっぱりするじゃろ？」

『……そうします』

「ネリー、新しい主を風呂場まで案内してあげなさい」

「は、はい」

気弱そのものといった風なメイドが忠夫の先導に立ち、甲斐甲斐しく風呂場まで案内した。

いつもの忠夫なら此処で相手をリラックスさせる為に、何らかの手を打つところなのだが……今の彼にそれを望むのは酷と言うものであろう。

その後、想像以上に広かった風呂場に度胆を抜かされつつも堪能していた忠夫だったが……それも乱入者によって終わりを告げる。

「忠夫様……お風呂に行かれるのでしたら、私どもに声を掛けてくだされば良いのに」

「そうですわ、酷いお方」

『いっ？！　リーラにクリスティナ！？　な、何で此処に！？』

「先代様が此処にいらしていると教えてくださったのです」

『じ、じーさん？！　図ったなァ――――ッ！？』

「「さ、忠夫様、御体を洗いましょうね？」」

『わ、わいはぁ――――ッ！？』

その日、ある風呂場にて一つの花が散った。

メイドさんの主になるよこっち

孤島は麗らかな日の光に包まれていた。
ＭＭＭ第五装甲猟兵侍女中隊の拠点の一つである東カロリン諸島の居城では、朝の食事が賑やかに行われている。

「忠夫様、今日のお食事は如何ですか？」
『ん、美味いぞ……この味付けはネリーちゃんかな？』
「はい、あと其方のスープはエルミーラ軍曹（ナースメイド）の作ですよ」
『あの童顔ちゃんか。そういや、昨日いい鶏ガラが手に入ったとか言っていたなぁ……ん、んまい！』

部屋の中央に設えられたテーブルには、質素ながら食欲をそそる料理が並べられている。
食卓に着いているのは忠夫だけでなく、各小隊の隊長達も同席していた。

当初はメイドたる身、御主人様と同席するのはいただけないと拒否していたのだが……忠夫が命令という名の泣き落としで受け入れさせたのだ。

……その時、メイド達の中には母性を垂れ流す者もいたが。

お堅いリーラや年配のメイド達は困惑気味であったが、賑やかな食卓というものもいい物だと最近では思い始めている。
もっとも、リーラ自身は同席しながらも忠夫の世話を焼く事に夢中のようだが……気付けば食事を済ませている辺り、一体どういうマジックだろうか？

朝食も終わりに近づいてきた頃、部屋にネリー・フロイアー少尉（パーラーメイド）が入ってきた。

「お、お食事中すみません……御主人様、先週末に依頼された情報が漸く入手できました」

『ん、ご苦労さん……ふ～ん、葵学園ねぇ。あ、ネリーちゃん、ご飯美味しかったよ』

「あ、ありがとうございます！」

顔を真っ赤にさせながら律儀に頭を垂れるネリー。

手ずから渡された資料には、この世界の日本が誇るエリート魔術師養成学校……葵学園の詳細が記されていた。

そして、二枚目には……。

『……式森和樹、か。冴えない面してるけど、なるほど……特異点だな、こりゃ』

一人の男子高校生に関する詳細が記されていた。

その内容は今までの経歴から、魔法回数、果てはその血筋まで事細かいものだ。

『良くここまで調べられたなぁ……セキュリティも並じゃないだろうに』

「それなのですが、何故か数日前地下市場（アンダーグラウンドマーケット）にばら撒かれていました。どこかの探魔師（クラッカー）が学園のサーバに侵入し、撒いたのだと思われますが」

『……ふぅん、流石特異点ってところか？　本人にしてみれば溜まった物じゃないだろうけど……それで、何処が動いているんだ？』

忠夫は男子生徒の資料写真に憐憫の情を催す。

……が、そこは彼の性故か、男の為に思考を割くのを内心苦痛に思うのであった。

「現在はっきりとした動きを見せているのは三家……宮間家・風椿家・神城家、いずれも学園に通う娘に式森様を篭絡せよと指示を出している模様です」

『……ふざけているな、その子達はそれに同意しているのか？』

「神城家はハッキリしませんが、残り二家は積極的です……特に宮間家のご息女・夕菜様は幼少の折、式森様と接点があったようです」

そう言って、対象の資料を渡すネリー。

既に周りのメイド達は食事を終え、速やかに片付け退室している……物音一つ立てずに。

忠夫は渡された資料に付随していた写真に視線を移す……そこには大きな瞳を輝かせながら、笑顔を振り撒いている少女が写っていた。

『この子が宮間夕菜、か……ん？』

「どうかなされましたか？」

『……いや　（気のせいか？）』

写真に写る被写体に重なり、何かが見えたような気がする忠夫。

しかし注視しても分からなかった為、気のせいと判断した……そして、改めて三人娘の写真を確認する。

『ふむ、大中小と揃っているな……いや、大小小か？』

「……御主人様？　何を見て、仰っておられるのですか？」

若干目尻が下がる忠夫……無論、自分が隣にいる時にそのような態度をリーラが許す筈も無く。

『いってぇ？！　ちょ、ちょっと胸元見ただけじゃねぇか……イエ、ナンデモナイデス、ゴメンナサイ』

わき腹をこれでもかと抓られた忠夫は文句を口をするも、夜叉の一睨みに即降伏の意思を示した……絶世な美貌を誇るだけに、怒った顔も空恐ろしい。

彼女の御主人様となって以来、忠夫が勝てた試しは一度としてないのだが……またもや連敗記録更新のようである。

「そんな粗末な物を見なくても、身近に私がおりますから……御自由に、どうぞ御賞味下さい」

『あー、いや、その、悪かった……だからあんまり胸を押し付けないで貰えないかなー？　り、理性が』

「ふふふ、お気になさらず」

たわわに実った美乳を、これでもかと言うほど押し付けられた忠夫は気が気でなかった。

何せ、今の忠夫には異世界の住人を自らの眷属にする権限はないのである。

なのに、女性に手を出してしまえば後々後悔する事間違いなしなのだ……悲しませるという意味で。

……まぁ、既に手遅れな気もするが。

『（あ～～～、傍には自らその肢体を捧げる絶世の美女がいるというのに！　何故、俺はこんな不安定な状態なんだ！？　この世には神も仏もおらんのかっ？！）』

「忠夫様？」

震える手を必死に押さえつけながら、身悶える忠夫……自身がその神の一柱である事を忘れているようだ。

リーラは流石にやりすぎたかと、少し離れて様子を伺う。

『な、何でもないよ……ふぅ、しかしこの彼が起こした魔法……いや、奇跡の数々は本当なのか？』

「は、はい……雪を降らせたのも、男子寮と女子寮を合体させたのも事実です」

調書には式森和樹が入学以来為した奇跡についても書かれていた。それらはこの世界において奇跡に部類されるほどの規模であり、人の身で為せる事ではない。

さっきまでのピンクな雰囲気に顔を真っ赤にさせたネリーが肯定する。

「でも、忠夫様ならこれぐらい苦もなく出来ますよね？」

『ん？　……まぁ、な。けど、こういうのは力云々より意志の強さの方が大事だからな……そういう部分は見た目よりしっかりしているのかもな？』

リーラの呟きに苦笑しながら答える忠夫。

資料だけではっきりと断言は出来ないが、少なくとも自分の命をすり減らしてまでするような事ではない……それにも拘らずやってみせたのは無私の優しさか、それとも別の何かか。

それはともかく、彼女がこう言ったのは既に忠夫の秘密を知っているからだ……それだけではなく、他の小隊長も凡そは教えられていたりする。

リーラ達が秘密を知るに至った原因は、唯一秘密を打ち明けた老人……前任であるロメスト老が既に此処を去ったからであった。

◆

事はクリスティナ大尉が療養生活に入った頃に起きた。

「横島殿、わしは此処を去ろうと思う」

『ん？　どういうこった？』

「横島殿のなすべき事は、この世界にとって最重要事項であるとわしは認識しておる……なれば、ＭＭＭの総力全てで持って補佐すべきだと決心したのだ」

『いや……そりゃありがたいけどさ、流石に大袈裟過ぎやしないか？』

忠夫にしてみれば、１５０名以上の仲間を自由に動かせるだけでも過剰だと思っている。

しかも、全員有能なメイドなのだ……これ以上は贅沢だろう。

無論、世界が崩壊する事を思えば……贅沢云々など言っている場合ではないのであろうが。

「無論ＭＭＭ総力ともなると万単位に上る故、並みの統率力ではまとめる事はできんだろうが……横島殿であれば容易かろう？」

『無茶言うな！？　幾らなんでもそりゃ過剰戦力だ、戦争する訳でもあるまいに……此処の第五中隊だけで充分だよ』

「むぅ……欲がないのぅ、流石多くの女性を侍らせているだけある

な！」
『ほっとけ！』
忠夫は内輪ネタを喋りすぎたか、と頭を痛めた。
「しかし失敗が許されぬ以上、他の中隊との連携も時には必要だろう……一度総会を開いて紹介しておこうと思うのだが」
『……はぁ、分かったよ』
こうして副会長の名の下、ＭＭＭの臨時総会が行われる事となった。

そして、忠夫の紹介が行われた時、一人のメイドが衝撃を受ける……その優れた能力故に感じ取れた絶対的な存在力に。

「あ、貴方様が？」

壇上の忠夫に問いかけたのは第一装甲猟兵侍女中隊長のクレア・エバートン大尉。
いつもは透き通るような音を奏でる彼女の声は、微かに震えている……その身を走る歓喜によって。
『あぁ、俺が第五中隊の現主だ』

忠夫は突然の問いかけを不思議に思いながらも、彼女を見つめつつそう答えた。

そして、それで充分だった。

……それだけでクレアは忠夫という存在を、絶対主と認め傅いてしまったのだ。

これには全てのメイド及び関係者が度胆を抜かれた。

完璧なメイドの一人である彼女が、まさか主人以外に忠誠を誓うとは思わなかったからだ。

『……おいおい、確か君は第一中隊の中隊長だろ？　俺に傅くのは不味くないか？』

「はい……しかし、私は貴方様に仕えたく存じます」

『……と、言われてもなー』

「良いではないか、忠夫殿。彼女は優秀なメイドだが、だからこそ自身が仕えるべき主人も見極められるというものだ……幸い、彼女の現主人も諦めているようだしな」

ロメスト老の視線の先には、苦笑しながらも頷いてみせるＭＭＭ会長の姿があった。

『――――――――ふぅ……きちんと引継ぎをして、しっかり地盤を固め終えた後なら歓迎するよ』

「あ、ありがとうございます！」

こうして……幾らかの混乱もあったが、忠夫の顔見せは無事終了した。

ちなみに、ロメスト老はＭＭＭの連携を確固たる物にする為、恩人

たる忠夫の為に復帰したゼルマ中佐（ハウスホールドヘルパー）とその夫と共に奔走している。
まぁ、そんな事はともかく……自身の事を知る存在が全くいないというのは今後不都合が起こると判断した故に、理解者を作る事にしたのだ。
最も身近なリーラとそれに近いクレアには全てを……そして中隊の意思を纏める為、小隊長には己の正体以外を明かしたのだった。
ちなみに、クリスティナが復帰すれば彼女にも全てを教える予定である。

◆

私はリーラ・シャルンホルスト大尉……今年２０歳になったメイドだ。
現
在は御主人様であられる忠夫様の第一侍女長であり、ＭＭＭ第五装甲猟兵侍女中隊の中隊長を務めている。
本来であれば、クリスティナ大尉が務められる筈だったのだが……療養の為、私が引き継いだ。
もっとも、忠夫様の秘密を知る私としては好都合だったが……少し不謹慎か？

あと、クレア・エバートン大尉は私の補佐に落ち着いた……正直、代わった方がと思わないでもないのだが。
そんな彼女は忠夫様の第二侍女長も務め、私同様全てを教えられている……私などより余程女性らしいあの人が、忠夫様の傍にいるのは気が気でないのだがな。

それはともかく、現在私は忠夫様と共に今後の事を話し合っている最中だ。

『しかし、この坊主の女難体質はもとより……周りの環境も凄まじいな』
「えぇ、正直関わりたくない部類に属しますね……特にこの２－Ｂの生徒とは」
『あぁ。とは言え、このまま見過ごす訳にもいかんしなー……今後の為にも』

忠夫様が言うには、式森和樹という男子がこの世界の今後の運命を担っていると言う。
正直、この優柔不断で冴えなさそうな男子がそのような大物には見えなかったのだが……忠夫様の言葉には確かな裏づけがあった。

「地球の龍脈との結合、でしたか？」
『あぁ……こいつの魂は不完全ながらにも、地球の動脈とも言えるそれと繋がっているからな。どういう過程でそれがなされたのかまでは分からんが、厄介なものさ』

本来であれば、それでも取るに足らない事象との事なのだが……何でもこの世界は不具合が起きているらしい。

第一に……この世界には忠夫様のような神魔という超存在が明確に

存在しない故に、人間の力の上限が突き抜けてしまっているということ。
これは非常に不味く、一定以上の力を持った存在が世界そのものを護っていないという事になるのだ。
しかも、人間の力自体に上限が設けられていない故に、世界の力の保有量を突破してしまう恐れがあると言う……まぁ、これに関してはまだまだ猶予はあると忠夫様が仰られたので安心だが。

第二に……魔法を使いきって塵となった人の魂が冥界という所にいかず、地球そのものに還元されてしまうという事。
これは先ほどの事より不味い事であるらしい。
件の式森和樹は既に地球自体と融合しているような物であり、例え魔法を使い切っても明確な死は迎えないだろうとの事だ。
……しかしこれには続きがあり、死は迎えない代わりにより地球との融合が進むと言う。

それは非常に不味い、不味過ぎるのだ。

『既に幼少時に一回、そして学園に来て早々に二回使用しているか……残り5回、放置したら間違いなく近い内に使い切るな』
「そして地球との完全同期、ですか」
『そう、そうなるとこいつは今まであった枷という名の安全弁を失い……より大きな力、地球と言う力を揮える様になってしまう。しかし、人間という蛇口は地球に比べて小さすぎる』
「小さい故に、他の出口を求めて貯蔵側の地球が鳴動すると言うのですね……天災として」
『あぁ、地球にとっては溜まったものじゃないだろうな……しかも、この世界には抑止力が存在しない』

そう、それが第三の不具合。

世界を安寧秩序に保つ為の力が存在しないが故に、例え世界の寿命が磨り減っても見過ごされてしまう。
しかもそれに人が気づく事は早々ない……精々、物好きな研究者などが気づくぐらいだろう。

「頭が痛い事この上ないですね……正直、忠夫様がいらしてくれなかったらどうなっていた事か」
『ははは、その俺自身も厄介ごとを抱えているけどなー』
「それは仕方のない事です、忠夫様も被害者なのですし」

全く、この御方は……もっと傲慢な態度をとられてもいいだろうに。

『しかし、だ……こうなると早めに日本に往って、奴に介入しないとな』
「それはそうですが、どのようにでしょうか？」

如何様な力でも揮える忠夫様はともかく、我々は魔法を嗜んでない故に編入は不可能だ……忠夫様の為ならば、今からでも修得して見せるが。
しかし、それでは時間が無駄に過ぎるだけの可能性もある……時間はそれほどある訳ではないのだから。

『まぁ、俺が編入するしかないだろうな……今の姿じゃ無理だろうが、変身すれば問題ないし』
「我々はどうしましょう？」
『んー、そうだなぁ……有志を募って、俺が魔法の力を開眼させようか？』
「そのような事が？　いえ、忠夫様なら容易いのでしょうが……仮にもエリートを育てる所へと送れるほどの逸材がいるでしょうか？」

まぁ、数はいるし、才能豊かな人材は揃っているから潜在的に魔法分野に秀でた者もいるか？
いや、それ以前に私はどうすれば忠夫様の傍にいられるだろうか？
もし、魔法の才能が私になければ……。

『とりあえず、皆を集めて確認を取ろう……時間はそれほどないだろうからな』
「はい」

あれこれと悩むのは後だな、とりあえず志願はするが。
……忠夫様、どうか私に御加護を。

◇

城の門前には所狭しとメイド達が集っていた。
しかし決して騒然とはしておらず、規律正しく並び傅いている……
その数、約３００人。
クレア大尉の移籍に伴い、人事を見直した結果増員されたのだ。
「忠夫様……ＭＭＭ第五装甲猟兵侍女中隊、全て此処に集いました」
告げるのは第二侍女長のクレア大尉……その表情は絶対主と崇める

忠夫を前にして、この上なく法悦としている。

『ご苦労さん……やれやれ、こうして並ばれるとやっぱり過剰戦力だよなぁ』

「いいえ、そのような事はありません……忠夫様の御威光を示すには足りないぐらいです」

『いや、威光って……まぁ、いいや。それより、よく集まってくれた。今日こうして集まって貰ったのは他でもない、これからの行動に関する人事を決定する為だ……これは階級や年齢に関係なく決める故に自分の意思を第一に考えてくれ』

クレアの恍惚とした声色に若干頬が引き攣るのを感じながらも、事を先に進める忠夫。

張り上げるまでもなく隅々まで浸透する声にメイド達は聞き惚れていたが、その内容にハッとする。

それはつまり、組織の上下に関係なく忠夫の傍に仕えられる可能性を示しているからだ。

『俺達がこれより拠点を日本に移す事は既に知っているだろうが、同時に俺と幾人かが葵学園に編入する予定だ……それ以外の者は拠点に待機するか、別の任務についてもらう』

「葵学園……確か、其処はエリート魔術師養成学校では？」

『そうだ……皆が魔法を嗜んでいないのは承知の上だが、それを承知で聞く』

忠夫の言葉を聞き入るメイド達……その眼差しは真剣そのものだ。

『志願する者のみ、俺が潜在的に眠る魔法の才能を引き出そうと思う……魔法を身に付ける事に忌避感のない者は立ってくれ』

忠夫としては彼女達のメイドとしての誇りはよく理解していたので、数人いればいいかなー……と思っていた。

しかし……忠夫を絶対の主人と認め仕える彼女達が、その程度の事で躊躇する筈もなく。

ザッ！！！！！

『いっ？！』

「「「「「「我々一同、御主人様の為ならば、如何様な道でも乗り越えて見せましょう！！！」」」」」」

予め打ち合わせでもしていたかのように宣言するメイド達。

しかし、誓ってそのような事はなかったと言っておこう。

流石の忠夫もこれには腰を抜かしてしまった。

『……は、ははは、やっぱ過剰戦力だよ』

そう、力なく呟くしかない忠夫であった。

●現時点でのＭＭＭ第五装甲猟兵侍女中隊編成

★中隊本部

・中隊長……リーラ・シャルンホルスト大尉　（第一侍女長）

・中隊長補佐……クレア・エバートン大尉　（第二侍女長）

・中隊長補佐（暫定）……クリスティナ・ハーヴェイ大尉　（第三侍女長）

☆第一猟兵メイド小隊（定員４０名）

・小隊長……ネリー・フロイアー少尉

☆第二猟兵メイド小隊（定員４０名）

・小隊長……ベアートリクス・ヤンケ少尉

☆第三猟兵メイド小隊（定員４０名）

・小隊長……エルゼ・ハンスマイヤー少尉

☆第四猟兵メイド小隊（定員４０名）

・小隊長……ルイーゼ・バイザー少尉

☆戦車猟兵メイド小隊（定員４０名）

・小隊長……アンナ・コールディンク少尉

☆捜索メイド小隊（定員４０名）

・小隊長……セレン・ラドムスキー中尉

☆装甲メイド小隊（定員３０名）

・小隊長……ヴァルトルート・レーマン少尉

☆工兵メイド小隊（定員３０名）

・小隊長……ゲルダ・ヴィッターマン少尉

初めは全中隊の中隊長を抜擢しようかと思っておりました……収拾がつかなくなりそうなので止めましたが（＊´Д｀＊）

ちなみに忠夫は霊波刀とサイキックソーサー主体で、魔法回数は１５万程度に誤魔化す予定です。

学生になるメイドさんとよこっち

その日、私立葵学園２－Ｂの教室はＳＨＲ前から不気味なほど静けさに包まれていた。
いつもは陰謀を練り、他人を蹴落とす事に熱中し……いかに金・地位を得ようかと躍起になっている彼らが、である。
それは率先して厄介ごとを起こす仲丸由紀彦や松田和美も同様であり、神妙な顔つきで席に着いていた。
そんな彼らに最も動揺し、不安を顔に出しているのが式森和樹だった。

「（何だ？　何で皆一言も喋らないんだろう？　……また何か起こるのか？）」

この学園に来てからというもの、不幸を背負って歩いている彼は先の見えない現状に胃が痛くなる思いであった。
元凶の一人たる宮間夕菜は落ち着いた様子だったが。

やがてＳＨＲの時間となり、同時に教室の扉が開いた。

「あー、皆席に……着いているな」

入ってきたのは担任の伊庭かおりである。
その顔はいつもにまして眠そうであり、寝癖もそのままの有様だった。

「ったく、何で朝っぱらから呼び出しを受けなきゃならないんだ…

…こっちは夜遅くまで新作をやっていたんだぞ？」
「……それは伊庭先生が悪いんじゃ」
「あぁ？！　何か言ったか、式森ぃ！？」
余計な事を言って、苛立ち全開のかおりに睨まれる和樹……自ら地雷を踏む事にかけては一級品のようである。
ごにょごにょと言葉を濁す和樹から視線を外し、ガシガシと頭を掻いたかおりはやおら咳をすると連絡事項を告げた。
「あー、まぁ、あんたらの事だ……どうせ情報は掴んでいると思うが、今日からこのクラスに二人、編入してくる。ちなみに、男女一組な」
「（……あぁ、なるほど）」
和樹は納得した。
いつも騒がしい筈のクラスメイトが静かな訳だと。
しかし、そこでふと疑問に思う。
「（あれ？　でも、それならもう騒ぎ出していてもいい筈じゃ……？）」
和樹はてっきり新しいクラスメイトが男子か女子かとかで賭け事をしていたと思っていたのだ。
しかし、かおりが男女一組と告げても騒ぎ出す気配はない……寧ろ、重圧が増すばかりである。
ふと和樹が夕菜を見てみれば、彼女もどこか居心地悪そうにしていた……流石にクラスメイトの異変を感じ始めたようだ。
その時、今まで黙っていた仲丸が声を上げた。
「それで、先生……その者達は、どういった関係ですか？」

「いや、わたしも知らない……言ったろ、朝早くに起こされたって。んじゃ、今から紹介するよ」

かおりはだるそうにそう答えると、開けっ放しになっていた扉に向かって声をかけた。

「入ってきていいぞ」

『「失礼します」』

そう言って入ってきたのは、爽やかな表情を浮かべる男子と銀髪を結い上げ涼やかな表情を浮かべた女子であった……言わずもがな、忠夫とリーラである。

二人はかおりに促されるままに、黒板へと自身の名前を書いた……リーラが思わずドイツ語で書きそうになり、忠夫がそれをやんわり嗜めるといった一面もあったが（ちなみに、この時クラスの大半が頬を引きつらせた）。

「んじゃ、軽く自己紹介してくれ」

『うっす……初めまして、俺の名前は横島忠夫。歳は１７で、好きな事と特技は体を動かす事。少し特殊な環境だった関係で、学校生活は初めてなんだ……だから宜しく頼む！』

そう挨拶して、軽く頭を下げる忠夫。

「初めまして、皆様……私の名前はリーラ・シャルンホルストと申します。年齢は１７歳で、好きな事と特技は家事全般です。私も特殊な環境化で育った為、今回初めて学校に参りました……どうか宜しくお願いします」

静かに頭を垂れるリーラ。

その様に若干見惚れる者もいたが、仲丸と松田は違った。
居ても立ってもいられないと言った感じで、揃って挙手すると質問を投げかける。

「私は松田和美よ……ところで、貴方達ってどういう関係か聞いていいかしら？　（恋人同士じゃないわよね？）」
「そうだな、同じような境遇のようだけど……此処はクラスの団結をより確かなものにする為に、是非とも教えて欲しい。ちなみに、俺は仲丸由紀彦だ（赤の他人なら問題なし、精々俺達の役に立ってもらおう……怪しい関係なら、男は即処刑、女の子は即洗脳だ！）」

あくまで興味ありますと言った態度を前面に押し出して聞く和美と、真っ黒な考えを真っ白な嘘で塗り固めた言葉を白々と語る仲丸。
聞いていた和樹は思わず内心、「あぁ、彼らが仲丸達の餌食にッ！？」と呻いていたが……日和見な彼が動く筈もなく、答えがリーラの口から紡がれた。

「忠夫様と私は御主人様とメイドの関係でございます……無論、私自身の想いはそれ以上ですけど」
『お、おい、リーラ？！』

ただし、答えは斜め上をいったが。
言葉が浸透した瞬間、仲丸達は教室の一角に陣取り密談をし始めた……かおりも慣れたもので、この程度の事では注意する事もなかった。

「（おい、どう思う？　一応、明確に恋人とは言わなかったが）」
「（少なくともリーラって子の方は怪しいなんて物じゃないでしょうね……あれは恋心なんて生易しい物じゃないわよ）」
「（えぇ、あれは崇拝より尚奥深い思いね。美人だし、幸せそうだ

し……あぁ、妬ましいわ。いつか呪い殺してやるリストに書こうかしら）」
「（ちょ、ちょっと矢夜！？　こんな時に黒手帳出さないでよ！　そういうのはもっと厳かにやるべきよ！）」
小柄な千野矢夜の後ろに陣取っていた諏訪園ケイが、目に入ってきた異様な書き込みのされた手帳を見て非難する……言っている事はどこかずれていたが。
その隣ではカメラを構えた酒井麻里子が密談には加わらず、リーラ達を激写している。
「（あの男の方……横島と言ったか、かなりいい線いっているな。体つきは分からんが、精悍さは中々だぞ）」
ジッと、忠夫を品定めしていた北野岳也がポツリと呟く。
その途端、忠夫は理解不能な悪寒に襲われ……秘かにそれを察したリーラが、北野を危険人物と判断していたのは余談だ。
仲丸達もそんな北野から若干距離をとりつつ、討議を再開する。
「（ともかくよ、目に余るようなら手出しも必要でしょうが、暫らくは静観するに留めましょ……下手に藪を突いて仲が進展しては元も子もないし）」
「（しかし、奴らが甘酸っぱい雰囲気を発し始めたらどうする！？　少なくとも、既に主人とメイドという究極系に行き着いているんだぞ？！）」
「（そうよ！　御主人様とメイドなんてエロエロじゃない！　学園内で淫行に走ったらどうするのよ！？　私達はそれを悔しく見つめる破目になるのよ？！）」
「（いや、それよりあの横島という奴は御主人様なんて呼ばれているぐらいだ……支配する事に慣れているに違いない！　そうなると

最悪クラスを、いや学園を掌握し兼ねんぞ！？）」
「「「（それは見過ごせない！）」」」
もっとも直ぐに意見は支離滅裂になり、最終的に忠夫は要注意人物（式森並）と認定され、リーラは要保護対象（夕菜と同様）となったが。
『（聞こえているんだけどなー……つーか、実際接してみると半端じゃねぇな。これからこいつらと同じ教室で過ごすのかと思うと……はぁ～）』
「（全くです、ネリー達を他所のクラスに入れたのは英断でしたね）」
『（あぁ、我ながらあれはナイスな判断だったと思うよ……それより、まともそうな奴も少なからずいるな）』
「（えぇ、事前情報通りで間違いなさそうです……できるだけ彼らと行動を共にした方が無難かと）」
クラスの大半が密談する中、忠夫達はそれを気にする事無く念話で会話をしている。
無論、ばれないように表情は戸惑っているように偽装していたが……何だかんだ言いつつも、注意を怠らない二人であった。
『あー、伊庭先生？　俺達はどうしたら』
「ん？　そうだな……お前達はあっちのまともな連中と親交を深めていなさい。あぁなったら連中は暫らく戻らないだろうから、今日は幸いこの後ＬＨＲだしね」
「分かりました……さ、忠夫様いきましょう」
『此処でその呼び方は止めてくれ、要らぬ諍いが起きそうだし』
「で、では……忠夫さん、と」

忠夫はそう嗜めつつも、常識組と接触を持った……リーラは何を想像したのか、顔を真っ赤にしていたが。
ちなみに、此処でいう常識組とは伊藤紀久・駒野智和・片野坂雪江・柴崎怜子・春永那穂・杜崎沙弓の事を言う……何気に和樹や夕菜は入っていない。

「俺の名前は伊藤紀久だ……こんな風貌だが、よろしくな」
『あー、一応初めての学園生活だけあってそれなりの情報は教えてもらってあるんだ……だからって訳でもないけど、君が極普通の男子だって事は理解しているよ』
「……お前、いい奴だな」
「……なら、俺の事も知っているか？」
『あぁ、駒野智和、だろ？　寡黙で、静かでいる事を好む男子……合っているか？』
「……ふ」

どうやら忠夫は男子と確かな友情を得られたようだ。
一方リーラはと言うと、雪江が話しかけ、怜子・沙弓が傍観しているといった感じだ……那穂は寝ている。

「綺麗な銀髪ですねぇ、羨ましいですわ」
「そんな、雪江様の御髪もお綺麗ですよ」
「様だ何て止してくださいな、わたくし達クラスメイトでしょう？」
「そうですね、ごめんなさい……私の事もリーラとお呼びくださいね、雪江さん」

落ち着いた感じの美女達が微笑みを湛えて会話している……まるで、そこだけ違う世界のようだ。

「……何か凄い会話、というか雰囲気ね」

「全くだ……まぁ、まともな連中が増えるのは喜ばしい事だけどな」
二人の会話を苦笑しながら見ていた沙弓だったが、２－Ｂの連中がこの状況にいつ目をつけるとも限らないので割ってはいる事にした。
「話し中すまないが、とりあえず各自席に着く事にしよう……奴らに要らぬ嫌疑を掛けられる訳にもいかんからな」
「……確かに、そうですね。親交を深めるのはいずれまた、と言う事にしましょう。そちらも協力してくださいな」
「あぁ、分かった」
「……気づかれない内に、な」
沙弓に話しかけられた雪江と伊藤達は、結託して忠夫達を自分達の席で囲う事にする……余程、普通というものに憧れているらしい。ちなみに、後ほどこの行為はばれるが、雪江の屈託ない微笑みで事無きを得るのであった。

◇

忠夫様と私は何とか無事に学園生活初日を済ます事が出来た。
途中、あの仲丸という男子生徒と松田という女子生徒に訳の分からない講釈を聞かされたが……とりあえず愛想笑いで流しておいた。

……助けてくれた雪江さん達には感謝せねばなりませんね。

『リーラは災難みたいだったようだな』

「えぇ、忠夫様は私が止める暇なく先に帰ってしまわれましたよね……お蔭で私一人大変な目に遭いました」

『あはははは……ちょ、ちょっと気になる事があってな』

現在、忠夫様と私は学園近くに買い取った屋敷の一つにいます……無論、普段住むのは寮の方ですが。

これらの屋敷には学園に通わないメイド達が常駐し、それぞれ５０名ほどが常駐し……残りは情報収集などで周囲に散っています。

「気になる事ですか？」

『あぁ、あの宮間夕菜って子の事でな……どうにも厄介なものが潜んでそうなんだ。まぁ、俺の考えが旨くいくなら、その限りでもないんだが』

忠夫様が言うには、宮間様には堕ちた精霊王と言う存在が宿っているらしい。

精霊王とは万物に宿る精霊達の王の事だが、そこに『堕ちた』と付くと全く意味合いが違ってくるという。

『堕ちる……と言うのは、制約が適用されなくなると言う事でもあるんだ。これが普通の精霊ならまだ王という制約が存在するから、救いはあるんだけどな』

「つまり……この世界の人間同様、上限無しに存在が強化されていくと？」

『あぁ、しかも傍にはこの上ない餌がいるだろ……式森和樹って言う、な』

「……そういう事ですか」

『仮に夕菜ちゃんに宿っているものを『終末(ブラックホール)』と名づけるなら、式森は『破滅(ホワイトホール)』か？　この二人が現状のまま結ばれると、どうなるか見当も付かん』

何とも言えない気持ちとは、こういう時の事を言うのだろうな。
こうまで厄介ごとが重なるとは、忠夫様の言うとおり特異点だからだろうか？
そうでなくても周りには非常識な方達がいると言うのに……。
２－Ｂの生徒は言うに及ばず、担任は吸血鬼ですし、養護教諭は正体不明ときている……何だかまだ増えそうな気もしますが。

「それで、どうなされるおつもりですか？　とりあえず優先される事は、式森様に魔法を使わせない事でしょうが」

その為に今も彼の周囲にはうちの連中を忍ばせている……ばれないよう苦心しているようだが。
何せ、彼自身はともかく……周りの方達が無駄に優れているからな。

『……俺達の最終目標は覚えているか？』
「はい……忠夫様と式森様の地球との繋がりを切った上で、この世界にない蓋となる守護神的な存在を生み出す事、ですね」
『あぁ、問題はどうやってその守護神を創造するかだったけど……今回分かった夕菜ちゃんの事はそれを補う為のピースとなりえる、かも知れない』
「堕ちた精霊王が、ですか？」
『創造する為の力は俺と式森の力でどうにかできるけど、核となる物をどうするかと言う問題があったからな……堕ちていようと、摘出した後に反転させてやれば問題ない』

忠夫様が言うには、反転させ正常に戻った精霊王を力の付与で更な

る位階へとクラスチェンジさせるらしい。
精霊を聖霊へと進化させ、地球に宿らせると言うのだ。

『問題はこの方法の場合、和樹が魔法を使いきるのは絶対認められないと言う事と……夕菜ちゃんと中の存在が必要以上に同化しすぎない、という条件が付く事だ』
「……もし、それがなされてしまった場合は？」
『……少なくとも、今の時点ではこれ以外思いつかんな』
「なれば、絶対に失敗は出来ませんね……ネリーや他の者にもきつく言い含めておかねば」
『ま、余り思いつめても駄目さ……こういう事は、な』

確かにそうかもしれない……ですが、忠夫様。
我々は……私は貴方様の手足となって付き従う所存です。
なればこそ、失敗は許されぬ……天地神明にではなく、忠夫様の名にかけて絶対に！

剣豪少女と出会うよこっち

２－Ｂの教室はいつもの騒がしさを取り戻してしまっていた。
そして、元々勉強が得意でない式森和樹もいつもの如く机に突っ伏している。
もっとも、臨時で授業を取り持った紅尉晴明教諭がわざわざラテン語で解説したのも一つの要因だろうが。

『あいつっていつもあーなのか？』

幼馴染である宮間夕菜に促されるまま、薬草学の授業で使用した資料である『月下美人』を返却しにいく和樹。
そんな彼を見送りつつ、忠夫は傍にいた伊藤紀久と杜崎沙弓に尋ねた。

「あぁ、大抵はな……夕菜ちゃんが来てからは特にその傾向が強いみたいだけど」
「そうだな、何と言うか……流されている感じか？」
『ふーん』

実に面倒臭そうに資料を取り、教室を出ていく和樹。
どうやら夕菜はついて行かない様だ。

「忠夫さん、私達も保健室へ行かなくては参りませんよ？」
『ん？　あー、そういやそうだったな』
「何かあったのですか？」

聞いてくるのはおっとり美人な片野坂雪江だ。
出会ってまだ一週間と経たないリーラと雪江だが、親友と言っても

いいくらい仲がいい。

『いや、魔法使用回数の測定をな……んじゃ、行くか』

「はい……それでは雪江さん、また後で」

リーラを伴って出て行く忠夫を見送る友人達。

「……何と言うか、何処までも自然体だな」

「あぁ、出会ってまだ間もないが……傍にいると凄く落ち着く」

「一種の清涼剤みたいなものね……ほんと、助かるわ」

「……違いない」

上から順に、紀久・沙弓・柴崎怜子・駒野智和の言葉だ。

彼らは忠夫達が来て以降、落ち着いた日常を送れている事に満足していた。

それはにこやかに手を振って見送っている雪江やいつもの如く眠っている春永那穂も同様だ。

「しかし、あの二人……特に忠夫の方はどれぐらいなんだろな、魔法使用回数」

「あぁ、それはこの前私が聞いたよ」

紀久の言葉に答えたのは沙弓だった。

「この前の魔法授業の時に気になって聞いてみたんだけどね……確か、１５万ぐらいだそうだ」

「……ほぅ、中々の数値だな」

「ま、あいつ自身はそれに驕る事無く体を鍛えているようだけどね」

「……ん？　何で分かるんだ？」

沙弓の言葉に疑問を覚えた智和は思わず質問していた。
「……いや、そのな？　先日階段で転げ落ちそうになった時に、抱き上げられてな……その時、その、分かったんだ」
若干、頬を染めながらもそう答える沙弓。
「あらあら、リーラが焼餅焼かないかしら？」
「べ、別に懸想している訳ではないぞ！？」
雪江の言葉に過剰な反応を返す沙弓……紀久達は思わずに顔が緩んでしまったのもしょうがあるまい。
ちなみに、こんな会話をしていたら食いつかない筈のない他のクラスメイトはどうしたかと言うと……どうもしていなかった。
それと言うのも、忠夫が出て行く間際に認識阻害の術を彼らに掛けていったからだ。
こうして、２－Ａの僅かな良心の平穏は護られた。

◇

忠夫達が保健室へと辿り着いた時、中から何かを叩く音が響いた。

『……何だ？』

忠夫が怪訝に思い扉を開け放つと、中には和樹の他に神城凛がいた。凛の拳は見事に和樹の左目に命中しており、次の瞬間彼はひっくり返った。

『……何やらかしたんだ、式森？』

「〜〜〜っ……え？」

「っ！　し、失礼する！」

顔を真っ赤にして出て行く凛に道を譲りながらも、何かしらイベントに遭遇している和樹を哀れむ忠夫。

『（なんつーか、昔の俺みたいだな）で、さっきの子に何したんだ？』

「君は編入生の……『横島忠夫だ……で？』う……そ、その、ベットに寝ていた彼女の胸を」

『……触ってしまった、と』

「……うん」

辺りを見れば、床に新聞紙が散乱している……これに足を取られたのであろう。

って言うか、何で新聞が？

『何と言うか、ラッキースケベか？』

「殴られたからラッキーじゃないよ」

『美少女の胸触っといて殺されねぇだけマシだ』

「……仰るとおりです」

斬り捨てるような忠夫の言葉に項垂れる和樹……それ以上に、リー

ラの冷たい眼差しが痛かったのかもしれないが。
忠夫はそんな和樹を他所に、保健室を見渡すとリーラに尋ねた。

『で、俺達はどうしたらいいんだ？』
「紅尉教諭の話では、そちらのロッカーに入っている測定器で勝手に計っておくようにとの事ですが」
『これか？』

忠夫はロッカーを開け、中から血圧計のような物を取り出した。
それにはメーターがついており、どうやら此処に数値が現れるようだ。

「ふむ、使用方法は血圧計と同じようですね」
『だな……しっかし、普通生徒だけで計らすか？』
「まぁ、誤魔化しようが無いのかもしれませんし……それに一応編入時にも計ってますから」
『なのに、今回改めて計ると……非効率的だよなぁ』

リーラが甲斐甲斐しく測定準備を進めるのを見ながら愚痴る忠夫……と、その時視界に映る人影に気付いた。
何の事は無い、和樹だ。

『ん？　どうしたんだ式森？』
「あ、いや」

和樹的には女の子と気兼ねなく接する事が出来る忠夫が羨ましかった……それ故、少し前から変わり始めた自分の環境を想い返して呆然としていたのだが。

「（僕と彼の違いってなんだろ？）」

無論、この学園に編入できるぐらいだから魔法の腕は確かだろうし、今見えている二の腕からして相当鍛えているのも分かる。
だが、和樹が知りたいのはそんな事ではない。
もっと内面的な事だ。
と言っても、考える事が苦手な和樹は数瞬でその考えを放棄したが。

「（馬鹿馬鹿しい、他人は他人じゃないか）ごめん、ちょっとボウッとしてたよ」
『……』
「な、何？」

和樹が謝罪して立ち去ろうとした時、忠夫の視線が和樹を捉えた。
その透き通った視線に、和樹は動く事も叶わなくなる……まるで磔にされたように。

『……式森、お前が平穏を求めるならもっと自分を持て』
「……え？」
『例え状況がどれだけ儘ならない物だとしても、流されて生きている以上……事態の好転はありえないぞ？』
「……」
『自身の現状を呪うよりも、周りの不条理に嘆き憤るよりも、まず自分をきちんと持て……全てはそれからだ』
「……僕は」
『弱者だとか強者だとかは関係ねぇぞ？　自分が何をしたいか、それを考えるのに力なんてもんは関係する筈無いからな……それでも儘ならないんだったら、最低でも流されないようにするこった』

忠夫がそれだけ言うと和樹から視線を外し、目を閉じる。
そして、彼の意を汲み取ったリーラは和樹を外へと導くと扉を閉め

た。
扉の向こうでは立ち尽くす和樹の気配が暫らく感じられたが、やがて静かに離れていった。
「……よろしかったのですか？　かなり追い込んでしまったようですが」
『さあな、どの道いずれはそうなったと思うけど。あいつが自分で変わらないんだったら、俺が変えるまでさ……例え、他の誰からか怨まれてもな』
メーターにキッカリ１５００００と示されるのを眺めながら忠夫は言い切る……らしくないものいいなのを自覚しながらも。
リーラはそんな忠夫に対して、ただ静かに頭を垂れるだけであった。

◇

保健室を辞した和樹は教室にいた。
少し前までは彼の目の痣の事情を聞いていた夕菜も共にいたが、一人にして欲しいという願いを聞き入れ今は和樹だけが残っている。
その表情は思いつめたそれであり、力無く垂れた頭を支える掌は微かに汗ばんでいた。

「……僕は、僕は流されていただけなのか？」

零れ出た声に張りは全く感じられない。

その脳裏に浮かぶのは、これまでの出来事……夕菜達との係わりである。

理不尽な言い様、不条理な状況、問答無用な展開……思い返すのも鬱になるというものだ。

「だけど、それでも自分をしっかり持っていたら……流されなかったら、もっと状況は良くなっていたのかな？」

答えは出ない。

まぁ、考えが纏まらないのだからそれも当然なのだが。

ただ、少なくとも……今まで行った魔法行使の件だけは、後悔してないと断言できる。

「……一体、どうすればいいんだろう」

夕暮れ時が近づき、教室が西日に照らされる中……和樹は微動だにせずもの思いに耽っていた。

◇

夕暮れ時、神城凜は銀杏並木道を歩いていた。
落ち葉を踏みしめながら歩く彼女の感情を一言で表すなら不機嫌、
若しくは苛立ち。
手に持った竹刀袋をきつく握りしめる様は、何かを警戒しているよ
うにも見える……否、しているのだ。

「くっ……毎日毎日、いい加減にしろと言うのだっ」

呟きと同時に竹刀袋から真剣を取り出す。
凜は鞄と竹刀袋を放り捨てると、腰を低くし右手を柄に沿え……全
神経を研ぎ澄ました。

すー、はー……

気を抜けば昂りかねない気勢を無理矢理抑え、呼吸を整える。
次の瞬間、近くの銀杏の木が揺れた！

「っ！」

襲撃者は凜の手前に着地すると、残像を残しつつ跳躍して襲い掛か
ってきた。

「……シッ！」

その黒い影に対し、彼女は真剣を横一文字に斬り払う！

襲撃者の動きに十二分に対応した筈の一閃だった……が。
何と捉えたと思えた影は空中で更に跳躍し、凜に反撃の間を与える
事無く襲い掛かってきたのだ。

「っ？！」

振りきった刀を戻す事も叶わず、あわや押し倒されるかっ……と思った、その時！

「ガッ？！」

「っ！？……え？」

影は不可視の衝撃を受けたかのように、凜の目前で真横へと吹き飛んだ。

思わず目を瞑りかけた凜は咄嗟に理解できる訳も無く、呆けたような声を漏らす。

一瞬の自失後、視線を横へとずらすと……そこには複数の人影があった。

「御見事です、忠夫様」

「うむ、見事な一閃です」

『あんがと』

人影は先刻会った男性……忠夫と、その後方に控える二人の女性……リーラとエルミーラ・フロンメだった。

忠夫は素早く刀を鞘に戻すと、傍で傅いていたエルミーラへと渡す。

『いい刀だな、銘は無いのか？』

「生憎、無銘の一品です……ですが、貴方様にお褒め頂けたならこの子も本望でしょう」

『大げさだなぁ……んじゃ、烈風なんて銘はどうだ？』

「っ……ありがとうございます！」

顔を紅潮させて、感激を顕わにするエルミーラ……忠夫の方は苦笑気味だったが。
そして、そんな寸劇を見詰めていた凜は驚愕していた。
「（馬鹿な、あの位置から刃風のみで迎撃したと言うのか？！）」
凜の驚きも当然で、彼らまでの距離は優に１０メートルはあった。
しかも、魔法が使われた気配は一切しなかった……それでいてあの迎撃能力だ。
凜が唖然としていると、いつの間にやら忠夫が彼女の目の前まで来ていた。
『大丈夫かい？』
「……あ」
『咄嗟にフッ飛ばしちまったけど、問題ないよな？』
「あ、あぁ……すみません、正直助かりました」
差し出された手を取り起き上がる凜。
彼女にしては珍しく、男の手を抵抗も無く握り返していた。
「……っう、一体何事だ？」
その時、襲撃者も同じく立ち上がった。
凜は思わず名も知らない忠夫の背に隠れてしまう……同時にそんな自分に驚いていたが。
忠夫はそんな凜を一瞥するも、直ぐ襲撃者に視線を戻し……そして怪訝な顔をした。
『（……何だ？　えらい衰弱しているな……病気、という訳ではなさそうだが）』

「君かい？　突然割って入ってきたのは？」

しかし、その思考は襲撃者の言葉によって遮られた……どうやらかなりお冠のようだ。

……貼り付けたような笑顔がかなり気色悪い。

『そう言うあんたは何者だ？　女の子に突然襲い掛かるなんて、変態のする事だぜ？』

「へ、変態？！」

『ん？　そうだろ？　こんな往来のある道で、女の子相手に本能丸出しで飛び掛るんだから……見たところ人狼のようだけど、正に獣だな』

「け、獣！？」

とりあえず扱き下ろしてみる忠夫、相変わらず男には容赦ない。

襲撃者の男は顔を引き攣らせながらも、取り繕うように言葉を発する。

「……僕の名は神城駿司。まぁ、君の言うとおり人狼だよ……で、そこの凜の保護者でもある」

「……保護者なものか」

忠夫の背後で弱々しく呟く凜。

無論、忠夫はちゃっかり聞き取っている。

「あと、剣術の師匠もしているんだ……さっきのはその一環だよ」

ね、変質者じゃないでしょ……と、言わんばかりの表情だ。

忠夫の背後では、「毎日毎日殺す気か、私はただの高校生だぞ」とか「道場を継ぐ気は無い」とか「実家なぞ知るか！」などと呟いて

いる凜。
駿司は駿司で、「逐一どの程度になったか確認しないとね」とか「修行はしてもらうよ、家の方でもそう決まっているしね」とか「連れ戻せって言われてんだけどなー」などと言い返している。
……既に忠夫は蚊帳の外だ。
言い合いが進む度に、凜の顔は朱に染まっていき……遂には爆発した。

「……嫌だ、絶対に帰るものか！」

自分越しに交わされる会話に辟易しながらも、忠夫は会話の分析と先ほど気づいた事を再確認していた。

分かった事は幾つかあるが、とりあえず重要なのは二つ。

式森の婚約者候補の一人であるこの子は、実家に隔意を持っているという事。
そして、目の前の男が最早余命僅かで焦っている事だ。

『（さて、どうしたものかな？）』

忠夫としては、余計な事に首を突っ込みたくは無い……美少女である凜の事は色々な意味で気にかかるとは言え。
しかし、忠夫が熟考している内に事態は斜め上に進んでしまう。

「わ、私が好きなのはあのような軟弱者ではない！　此方の御仁だ！」
『へ？』
「へぇ、それじゃ家が決めた式森和樹君とやらはどうでもいいのかい？」

「そもそも家が勝手に決めた婚約者だろうが！　私は私の意志で生きていく！　勝手に私の人生を決め付けるな！！」

どうやら、いつの間にか話は婚約者関係に縺れ込んでいたらしい。

『（しっかし、見ず知らずの俺を巻き込むのもどうかと思うぞ？）』

忠夫がげんなりしていると、駿司は何を思ったのか、しきりに頷き出した。

「ふむ、そう言えば君には酷い言いがかりを投げかけられたね」

『俺は真実を言っただけだぞ？』

「……いいだろう、その喧嘩買ってやる。一週間後の夜九時、この先にある空き地で一対一の勝負だ」

「お、おい！　この御仁は関係ないだろう！？」

「おや？　凛の好きな男じゃなかったのかな？」

「ぐっ……し、しかし『かまわねぇよ……その独り善がりな思い、分かっていて尚貫くと言うなら叩き折ってやろう』……え？」

「っ！？　……言うじゃないか、その日が楽しみだよ。凛、それじゃあね」

「あっ、おい！」

駿司は忠夫の言葉に眼を見開くも、直ぐに平静を取り直しその場を去っていく。

後に残ったのは呆然とその場に立ち竦む凛と、夕陽を見詰める忠夫……そしてそんな二人を見詰めるリーラ達だった。

『やれやれ、もっと好き勝手すりゃ楽になれるものを』

「……え？」

『長生きして頑固になるのも分からないで無いが、そう言うのは自

分の時だけにしろっての……凜ちゃんだったかな？』
「あ……はい」
忠夫は自分を見上げる凜に視線を向け、告げる……男の真実を。
「……え？」
『……不器用で身勝手な思いやりさ、最早自分では止められないんだろう』
「……そんな」
師に反発していた凜だったが、それでも忠夫から告げられた言葉は青天の霹靂だった。
思考が纏まらない彼女はただ呆然とするしかない。
奇しくもこの時、凜と未だ教室にいた和樹は似たような心境に立たされるのであった。

衝撃の事実を教えられた後……呆然と立ち尽くしていた私を気遣ってくれた横島先輩が、ご自身の屋敷へと招待してくださった。
同時に暫らく　（具体的には決闘が済むまで）、休む旨を学園に取り付けてもくれた……無論私の意思を確認した上で、だ。
正直助かった、こんな精神状態では授業など儘ならんからな。
先輩の屋敷はその大きさにも拘らず、何処か安心できる佇まいで心落ち着く事が出来た……正直、居心地が良すぎて定住したいほどだったりする。
そして現在……私は先輩の勧めでゆったりと身体を休め、夕食をいただき終わったところだ。

『さて、一息ついたところで今後の話といこうか』
「今後の、ですか？」
『そう……決闘自体はまぁ、受けてもいいんだが、それ以外の事でな』
「……決闘以外の事？」

首を傾げて問う私に、神妙な表情で頷く先輩。
そんな彼が語ったのは、要約すると以下の様な事だった。

1. 先輩が実は学生などではなく、とある問題を解決する為編入したという事。
2. とある問題の要たる存在が式森和樹であり、またその周辺の存在である事。
3. 問題を解決しなければ世界的に多大な損害……以上の被害が出るという事。
4. 渦中の式森和樹がそれを知らず、また事態を加速させる要因

が多数存在するという事。
5．　問題を解決できる存在が先輩だけであり、リーラさん達はそれを補佐する立場だと言う事。

『で、肝心の問題が何かという事なんだが……彼の体質の事なんだ』
「……それって」

式森の遺伝子の事だろうか？
それならば婚約話の出ている私も少なからず関係あるが。

『本来、俺の隣にいるリーラと主だったメイド以外に事の詳細を話す気は無かったんだけどな。君も知っての通り、彼には呆れるほど濃い血が流れている……が、問題は彼と地球との関係だ』
「え？」
『どうにも彼はその秘められた力故か、地球の龍脈……この星の動脈とも言える物と繋がってしまっているんだ』
「……はぁ」

一体どういう事だろうか？
私は先輩が話す事情が良く理解できず、思わず気の抜けた返事をしてしまった。
そんな私の心中を察してか、先輩は大まかに説明してくれた……この世界の成り立ちと魔法の関係、そして式森の異常性を。

「で、では式森が魔法を使い切ったら？！」
『あぁ、彼自身は死にはしないが……地球的には今より危険な状態になる』

事情を詳しく聴き、理解した今だからこそ分かった……現状の不味さを。

『式森自身魔法回数を気にし、使用しないように気を付けてはいるだろうが……彼自身の優しさがネックになっている』

確かに、今までの使用状況を考えると頷ける話だ。

ある意味美談ではあるが、その結果に待ち受ける事を思うと……不味すぎる。

『それを阻止する為に俺は来たんだが、来訪早々もう一つの問題にも気付いてね……その問題を悪化させない為にも、君の協力が必要なんだ』

「もう一つの問題、ですか？」

『君と同じ婚約話が出ている宮間夕菜ちゃんが抱えている物だよ……これまた本人は気付いていないけどな』

「夕菜さん！？」

先輩が語る夕菜さんに秘められている物とその危険性を聴き、私は頭を抱えてしまった。

確かに私も無関係ではないな、夕菜さんの嫉妬深さを考えると……まぁ、どちらかと言うと、玖里子さんの方が刺激を与えているだろうが。

『失礼ながら君達の事は此方で調査させてもらってね……実家と確執があり、婚約に否定的な君に目をつけたんだ』

「……なるほど、私だけでも婚約を破棄すれば」

まぁ、積極性のある玖里子さんがいる以上どれほど効果があるかは分からないが……私達より余程女性らしいし。

……とは言え、事情を詳しく話せない以上実家が聞き分けるかどうか。

『実家云々なら気にしなくてもいいぞ？　問題は君の心一つ、だ』
「……え？」
『今回の問題に対処するという事を考慮しなくても、君を取り巻く現状は……ふざけているとしか思えないからな』
「……先輩」

家の意向で護るべき娘の心を無視するとは、家を形作る人の心情を何だと思ってやがる……そう呟く先輩の表情はこの上なく恐ろしく、しかしそれ以上に心の温まるものであった。
そして私は決断する。
実家への本格的な反抗を。

そもそも周囲の知人は「子供の我が儘」だの、「親の意向に逆らうな」だの……私の思いは一片たりとも組んではくれなかった。
しかし先輩は家の事情を知った上で、家に対し怒りを顕わにしてくれた……心の底から。
そんな先輩のお役に立てるなら、心偽らず正直に生きよう。
例え、それが元で家との縁が切れようが構うものか！

「先輩、お願いします……私に力を貸して下さい」
『……いいんだな？　こっちから言っといてなんだが、式森自体はそれなりに良物件だぞ？　……流され易い奴だけどな』
「構いません……元より反抗して家出した身ですし、愛する相手は自分で見付けたいですから」
『……分かった。なら決闘が終わった後、実家に行くとしよう……君の心が相手に伝わるよう、俺が何とかする』

そういって先輩は私に柔らかく微笑んでくれた。
そして、翌日から私は先輩の屋敷で生活する事となった……何故か

メイド見習いとして。

◇

話し合いの翌日、決闘までの間屋敷に滞在する事となった凜は暇を持て余していた。
忠夫から暇潰しにと本やゲームなどを提供されていたが、周りで忙しく働いているメイドの事を思うと生真面目な彼女故に手をつける事など出来なかった。
そして……ではどうしようかと考えた時、忙しく働くメイドが視界に入ったのだ。

「メイド、家事か……よし！」

凜は思いついた事を実行に移すべく、家事手伝いを申し出た。
丁度その時リーラが外出しており、食事当番が気弱なネリーだった事もあり凜の願いが通ってしまう……それが悲劇を巻き起こすとは思いもせずに。
それから３０分後……簡単ながらも心を籠めて作った料理を手に、凜は意気揚々と忠夫の前に姿を現した。

「先輩、心を籠めて作りました……あの、食べてくれませんか？」

凜は煮え滾り奇声を発するシチューを差し出しながら、可愛くお願いする。
忠夫は目の前に置かれたシチューと凜を交互に見詰め、料理を作る事となった経緯を聞き内心涙した……嘆きの涙を。

『そ、そうなんだ……と、ところでネリーちゃん、リーラは？』

とりあえず忠夫は先延ばしの為、他の仕事を終え様子を見に来たネリーにリーラの行方を聞く。
ネリーも忠夫の状況を一瞬で把握し、己の失敗を悟り震えながら報告する……後々の叱責を覚悟し。

「リ、リーラ様は学園での式森様の監視をより完璧にするべく、指示を出しに行かれました……もうそろそろお戻りになる筈ですが」
『そ、そうか』

忠夫は全てを受け入れた。
最早この状況は覆らないと。
元より美少女の料理を無碍に扱う等という選択は彼には無い……例え、それがどの様な代物でも。
内心嘆きの涙を目幅で流しながら、震える手を合わせる。

『……い、頂きます』
「どうぞ、ご賞味下さい」

見る人が見れば、いや大抵の者なれば頬が緩みそうになる笑顔を零す凜。
自身にとって大恩ある異性が、手料理を食べてくれる……それは女性にとっては嬉しい事であろう。

忠夫はそんな彼女の笑みに頬が緩みそうになるも、目の前で異臭を放っている存在感がありすぎる料理に引き攣ってしまうのであった。

「（ご、御主人様、申し訳ございません！　申し訳ございません！　申し訳ございません！）」

『（き、気にするなネリーちゃん……これも男の甲斐性だ）……では』

念話で必死に謝るネリーを宥め、意を決しスプーンでシチューを掬う忠夫。

そして、いざ口に含もうとしたところでリーラが帰還する。

「只今戻りました……ッ？！　そ、それは！？」

即座にその場の異常に気づくリーラであったが、時既に遅し……全てを諦め、シチューを食す忠夫。

『……（パクリ）……ッ！！！　……ざ、斬新な味だね』ガクリ

「せ、先輩？」

「忠夫様！？」

「御主人様！？」

いい笑顔でサムズアップした後、轟沈する忠夫……口からは白い何かが出かけている。

凛が呆然と倒れ伏した彼を見詰める中、リーラとネリーは必死に白い何かを元に戻そうと苦心する事となった。

何とか最悪の事態を回避したリーラは、事の顛末を詳しくネリーか

ら聞きだす……その結果、彼女は怨磋の念を纏う事となった。

「忠夫様にあのような神様（ゲキブツ）さえ悶絶させる毒を差し出した事は……とても赦せない所業ですが、此処で貴女を討ち取ってもあの御方は悲しむだけでしょう。故に、貴女には淑女として完璧になって貰います……い・い・で・す・ね？」

有無を言わせぬ迫力で、凛に命じるリーラ。
無論、大恩ある先輩をあのような状態にした責は甘んじて受けるべき、と凛は顔を蒼白にしながら同意した……もっとも、劇物判定された事には心底ショックを受けた様だが。

◇

そんな凛も約束の日が近づく頃には、人並みの腕になっていた……多大なる犠牲はあったようだが。

そして、決闘の日。
月明かりに照らされた空き地で彼は待っていた。

「やぁ、よく来たね」
『（既に瀬戸際だな、ふむ）逃げる理由など無いからな』

「……勝って当然だと？」
『あぁ、そもそも俺が出向いたのはお前の心を丸裸にする為さ……それを為したら、闘う必要すらないだろうからな』
「……何？」

そう言いながら忠夫は≪言≫≪霊≫の文珠を発動、自身の声帯に効果を宿す……これによって忠夫の持つ神性と合わさった言葉は、この上ない強制力を持つに至る。

『さぁ、俺が今からお前に厳命する……≪お前は今から凛ちゃんに自分の気持ちを、赤裸々に語る事になる≫！』
「――――ッ？！」

忠夫の言葉を訝しんでいた駿司だったが、厳命の言葉を聞いた途端……自身が内に押さえ込んでいた何かが弾けた。
そんな彼の様子に首を傾げていた凛であったが、次の瞬間唖然とする事となる……そしてそれは駿司も同様だった。

「俺は、自分の命が最早そう永くない事を前から知っていたんだ……君が幾分か育った頃にはもう、ね（な、何？！）」
「えっ？」
「だからなのか、どうなのか……今となっては僕自身判らないけれど、君に俺の全てを教えておきたかったんだ（ど、どうなっているんだ！？）」

自身の口が勝手に己の心の内を語る……そんな怪現象に、駿司は内心パニックになっていた。

「でも、本当に必要な事はそんな事じゃなかったんだな……君には押し付けじゃなくて、自由に好きな事をやらせるべきだったんだ（

何で……ッ！）」
「駿司……兄、さん」
「けど、どうやら僕は永く生き過ぎたらしい……一つの事に固執し過ぎて、君に謝る事も新しい道を示す事もできなかった（彼のあの表情は……もしや）」

一つの心を吐露する度に、駿司は次第に落ち着いていった。
そして視界に入った忠夫の見守る様な表情を見て思う。

あぁ、やってくれたな……と。

確かに自分は素直ではなかった、凝り固まった永い人生を理由に目の前にいた少女と向き合えなかった……と。

「本当は……元気な君が見たかっただけなのに、普通に生きて笑っている君を見たかったくせに。ハハ、本当に愚かだよな……今更過ぎる」
「そ、そんな事は無い！　わ、私も意地を張っていたからお互い様だ！　それに……今からでも遅くは無い！」
「……凜」

全てを語れたからなのか、それとも凜の心の叫びを聞いたからなのか……駿司の体から力が抜け始める。
それを悟り、最後に素直ではない自分を導いてくれた忠夫に向き合う駿司。

……だが、忠夫のターンはまだ終わってはいない！

「ありがとう、お節介な仲介屋さん……もう、思い残す事は何も
『なぁに、言ってやがるんだ？』　……え？」
『俺は言った筈だぜ？　お前の独り善がりを叩き折ってやろうって、な。お前の素直じゃない心は叩き折ったが、俺は美少女の味方だからな……片手落ちで終わるような事はしねぇぜ？』
「ど、どういう事だい？」
「……先輩？」

戸惑いと困惑を孕んだ眼差しで見詰める二人を他所に、忠夫は駿司に近づく……意地悪な表情を浮かべながら。

『俺は美形の男がだいっ嫌いでな、それ以上に全ての女性の味方だ……つまり、凛ちゃんを喜ばす為だったら、幾らでもお前をピエロにできる心算だって事さ』

忠夫のあんまりな物言いに、頬が引き攣ってしまう駿司……今度は何をされるのだ、と。
そんな彼の思いなど考慮せず、立ち尽くす駿司の胸元に両手を当てる……すると、そこから極光が生まれ彼を覆いつくした。

「こ、これはっ！？」
「駿司兄さん？！　先輩！？」
『お前はついさっき心の中に閉まっていた感情を吐露すると言う、非常に恥ずかしい経験をした……これで死んでいたら恥ずかしさに悶える事も無かったんだろうが、んな勝手な事赦すわきゃねぇだろ？』

光が収まったそこには変わらず駿司と忠夫がいた。

「これは……？」
『お前は生きるんだよ……最低でも凛ちゃんが老成するぐらいまでは、な』
但し、駿司の肉体は若干若返っており……体には活力が満ちていたが。
「っ？！　わ、若返りの術！？　き、君は一体？！」
「え、えぇえええっ？！」
驚きを顕わにする二人だったが、またしても無視し何かを取り出す忠夫。
『ところで、これが何だか分かるか？』
「……？　カセットテープ？」
「……ま、まさかっ？！」
不思議そうにそれを見詰める凛と、数瞬後ある事に気付く駿司……そんな彼の顔は真っ青だ。
対して忠夫はいい笑顔で頷き、種明かしをする。
『そう、これにはさっきのお前の言葉が余す事無く収録されている……恥ずかし過ぎる自分語りが、な』
くっくっく、と嗤う忠夫。
それを聞いた駿司は膝を屈するしかなかった。
あぁ、もう俺はこいつに逆らえない……と。

もっとも、傍で聞いていた凜は微妙な顔をしていたが。

◇

グダグダな決着の後、二人を伴って帰宅した忠夫はもう一度事の詳細を語った……式森和樹に関する事を。
そして事の重大性を確信した駿司は忠夫に忠誠を誓い、協力する事となった。

『まぁ、最初にしてもらう事は神城家の腐った部分を切り取る作業だけどな……俺がやってもいいんだが、どうだ？』
「ふ……やらさせて貰うさ。結果的に神城家の為になるなら、心を鬼にしてみせる」
『……可愛い妹分に素直になれなかったくせに』
「ぐっ……ふ、ふん、何とでも言えばいいさ。折角生き永らえたんだ、今度は自分の好きに生きるさ……凜を見守る以外は、ね」
忠夫の切り返しに言葉が詰まるも、開き直った駿司は気にしない事にした。
「先輩、兄さん……はぁ～」

そうしてそんな二人のやり取りを見詰めるのは、大人気ないやり取りに呆れる凛であった……心のシコリは綺麗に取れていたが。

そんなやり取りがあった翌日、実家に帰った凛は忠夫を連れて両親と対談。
忠夫の助力を得た凛は己の心を両親に明かし、何とか和解する事に成功……もっとも、忠夫との仲を疑われたりもしたが。
駿司は別行動を取り、神城家に巣食う悪素を排除。
そんな彼は神城家に巣食い甘い汁を啜る害虫の多さに辟易したものであった。

◇

駿司が忠夫の番犬に成り下がり、神城家の問題が凡そ解決してから数日後。
和樹はと言うと、結局ハッキリした意思表示など出来ずに流されていた……まぁ、押しの強い夕菜に負けただけとも言うが。
そんな彼らは今下校途中で、学園の門を通り過ぎたところだ。
「あら、前にいるのって凛さんじゃありませんか？」

「えっ……ほ、本当だ」

弱々しい抵抗をする和樹と腕を組んでいた夕菜が前方に佇む凛に気づく。

彼女は竹刀袋を片手に銀杏の木を見上げていた……先日、駿司が飛びかかってきた時に登っていたそれを。

「何をされているんでしょう？　……あ、そうです。和樹さん、あれから凛さんと仲直りしたのですか？」

「い、いや……何故か会う機会がなくて」

しどろもどろに話す和樹だが、ある意味仕方がなかったであろう。何せ、決闘前は忠夫と行動を共にしていたし、彼女自身忠夫からの忠告で和樹を避けていたのだから。

「なら、ちょうどいいじゃないですか……仲直りするチャンスですよ！」

「え？　……って、ちょっ！？」

名案だ、とばかりに和樹の腕を引っ張り、未だ木を見上げている凛を目指す夕菜。

すぐさま傍まで近寄れた彼らだったが、意外にも先に声を発したのは凛の方だった。

「式森『先輩』、大事な話があるのですが……お時間宜しいですか？」

「「えっ？」」

静かに和樹達に向き直った凛は言葉を紡ぐ。

いつもと違い、威圧する言動も拒絶するような態度もない彼女に目

を丸くする二人。
凛はそんな和樹達にこれといった反応をせず、返答を待つ。
静寂に負け、言葉を発したのは和樹だった。

「えっと、何かな？」
「話というのは他でもありません……婚約に関してです」
「凛さん？！」

クワッと目を見開く夕菜。
まさかの愛の告白か？！　……と思い、止めに入ろうとする。
……が。

「本日を持ちまして、神城家が持ちかけた婚約は破棄させて貰います……一方的な事で申し訳ありませんが、お許し下さい」
「ッ……って、え？」
「え？」

予想していた言葉と全く違う、予期せぬ宣告にピタリと自分が止まってしまう夕菜。
そして、思いもしなかった言葉に呆然とする和樹。

◇

辺りを木枯らしが吹く中、最初に復活したのは夕菜であった。
「えっと、どういう事ですか？」
……もっとも、思考の方は未だ理解には及んでいなかったが。
そしてその心を占める感情も障害（ライバル）が減る嬉しさなどではなく、よく分からない物であった。
「言葉通りの意味ですよ、夕菜さん……元より私自身拒絶していた実家からの命令でしたが、昨日撤回させましたから」
「撤回、出来たのですか？」
「えぇ、とある御方の御助力を得て実家の強硬派連中を排ｊｙ……説得しましたから」
「今、排ｊｙ「説得しました」……そ、そうですか」
酷く良い笑顔で嗤う凛に、流石の夕菜も引き気味だ。
「あの凛ちゃん？　とある御方って？」
「それは機密事項です……元より、大恩ある御方の情報を晒すなど論外ですが」
「そ、そうなんだ」
自身にとっても如何にかしたい問題を解決した存在故に、教えて貰おうとした和樹であったが……凛の言い知れぬ気迫にすごすごと断念した。
「あの、凛さん？本　当に撤回されて良かったのですか？」
縮こまる和樹を他所に、どうにも納得できない夕菜が再度問いかけ

る。

「えぇ、元より式森先輩は好みではありませんでしたし……私は私を鍛え直したいですから」

凛は夕菜の問いかけに気負う事無く、ハッキリと答える……好みでないと言われた和樹は凹んでいたが。

兄と慕う駿司の葛藤に気付かず、ただ子供の駄々を捏ねていた自分と向き合う事が出来た凛。

その事実は彼女に大きな変化を齎していた。

「鍛え直す、ですか？」

「えぇ、自分の事で手一杯な未熟な殻を脱ぎ捨てる為に……実家と立ち向かえた事は本当に僥倖でした」

恋愛に感けている暇は無い……等とは思っていない。

ただ、愛する相手を得ようとする自分が未熟である事が耐え切れなかったのだ。

「まぁ、何はともあれ……これからは婚約者やライバル等ではなく、一人の友人として接しさせてもらいます」

「「は、はぁ」」

清々しい笑顔で宣言する凛に、何とも言えない気持ちになる和樹と夕菜であった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7933z/

刹那の愛の反逆・異世界漫遊録編　【まぶらほ編】

2011年12月25日18時12分発行